

愛媛大学教育学部

第138号

同窓会報



愛媛大学教育学部同窓会事務局

☎ 790-8577 松山市文京町3番

愛媛大学教育学部事務課内

☎ (089)927-9383(直通) FAX(089)927-9395

E-mail: dosokai.ed.ehime@gmail.com



有備無憂

愛媛大学教育学部
同窓会会長

高橋 治郎



同窓会会員の皆様、お元気にお過ごしのことと拝察いたします。コロナ禍で中止や縮小で行われてきた各種行事も、どうにか開催できるように頑張ってきました。街中を歩いている人の半数ぐらいの人が、マスクをしています。花粉症や黄砂の飛来、はたまた、化粧をしなくてよいとの理由のようです。いまだにマスクをしなければならぬのは病院ぐらいでしょうか。

さて、ご案内のとおり、今年度は愛媛大学が発足して七十五年目に当たります。そして、中止続きでした同窓会懇親会が八月二十五日に開催されます。多くの皆様のご参加をお待ちしています。当日は、大学内や大学周辺の変わりようも見ていただければと思います。景観が変わっただけでなく大学の組織や教職員数、学生や院生数、等々、ここ五十年、特に二〇〇四年四月からの大学法人化

によって戸惑うほどの変わりようです。

ところで、今年は元旦の午後四時十分頃、石川県で最大震度七を観測する地震がありました。震源地は石川県能登地方でマグニチュード七・六、震源の深さが十六キロメートルの大地震であり、能登半島を中心に甚大な被害が発災しました。さらに、四月十七日午後十一時十四分頃に愛媛県豊後水道で、マグニチュード六・六、震源の深さ三十九キロメートルを震源とする最大震度六弱の地震が発生しました。緊急地震速報が警報音とともに携帯と防災無線放送とで流れる中、「ワツサワツサ」と揺れました。久しぶりに身構えました。お隣の台湾でも、四月三日にマグニチュード七・四の台湾東部沖地震が発生し、大きな被害をもたらしました。

一九九五年一月の「兵庫県南部地震（災害名 阪神・淡路大震災）」以来、西南日本も地震の活動期に入ったとして、全国で「防災・減災対策」と「活断層調査」が進められました。その一方、学校をはじめ公共施設の耐震補強がおこなわれ、防災士の養成、自主防災組織づくり、市町ごとの防災

マップの発行等々、来る南海地震へ備えてきました。そうした矢先、二〇一一年三月十一日に「東北地方太平洋沖地震（災害名 東日本大震災）」が発生しました。この地震を受け、これまでの南海地震の想定をマグニチュード八・六から九と、より大きな規模とし、東海から東南海、南海、日向灘に及ぶ破壊域を広く設定しました。太平洋側を中心に震度七の揺れと大津波、瀬戸内海側でも地盤の悪い所が震度七、六強と想定されています。人的な被害はもとより多くの家屋や電気や水道、ガスなどのライフラインが壊滅的な被害を蒙ると予想されています。地震名も「南海地震」から「南海トラフ巨大地震」と呼ばれるようになりました。

この「南海トラフ巨大地震」に備え、各学校は学校の実情に合った「学校防災マニュアル」を作成し、児童・生徒、地域住民を災害から守るための避難訓練や子供たちの引き渡し訓練を行ってきました。また、愛媛県では県民に防災士の資格を取るよう働きかけ、各学校に防災士の資格を持つ教員を複数名置くことが進められてきました。

しかし、「今後三十年間における南海トラフ巨大地震の発生確率は八〇％」などという言葉で、すぐにも来るかのように身構えていたのに、なかなか地震が起これないの間延び状態に陥っています。これまで「南海地震」は、古文書の記録をみると九十五年から

百五十年周期で発生しています。前回の南海地震は、昭和二十一年（一九四六）年十二月二十一日に発生しています。地震の規模マグニチュードは八でした。通常の南海地震より規模の小さいものでした。「東北地方太平洋沖地震」のマグニチュードは九でしたから「昭和の南海地震」はマグニチュードが一小さいものでした。マグニチュードが〇・二違うと破壊エネルギーは二倍違います。ですから、マグニチュードが一違うとエネルギーは二の五乗、すなわち三十二倍違うのです。「東北地方太平洋沖地震」は、「昭和の南海地震」の三十二倍規模の地震だったので。近未来に発生する「南海トラフ巨大地震」は、この「東北地方太平洋沖地震」と同じ規模の地震とされているものです。

さて、この巨大地震に私たちはどう備えるか？ 地震で死んだりケガするのは物の下敷きになるからです。丈夫な家屋に住み、家具や家電など倒れてくるものをなくす。津波にさらわれぬよう、すぐ高台へ逃げる。食料や水を備蓄し、電気や水道、ガス等が使えなくなっても生きていく手立てを講じておく。こうしたことが大切なのです。先人は幾度となく発生した巨大地震等災害から生き抜いてきました。私たちは人命や地域社会を災害から守り、被害を最小限にする努力をしなければなりません。どうぞ災害から我が身を守り、地域を守るリーダーとしてご活躍ください。

表紙

「春麗に沈む」…………… 平井 晴樹
題字 元愛大教育学部教授 菊川 國夫

「有備無憂」…………… (1)

教育学部同窓会会長 高橋 治郎
心 響…………… (2)

「教職三十六年目
振り返れば「出会い」がある」
振川 昭二

職場だより…………… (3)

教師になって
四国中央市・川之江小教諭 石川 真有

卒業
新居浜市・船木小教諭 岩城 梨奈

教師になって
今治市・朝倉中教諭 前田 知希

全力で楽しむ生活
松山市・桑原小教諭 山口 彩夏

笑顔で 謙虚に 元氣よく
伊方町・三机小教諭 曾根 希美

尊師
松山市・附属中教諭 兵頭 宣彦

教育学部トピックス…………… (9)

令和六年度愛媛大学教育学部附属学
校園入学式・入園式を挙りました





教職三十六年目

振り返れば

「出会い」がある

新居浜市立泉川小学校校長

井川 昭二

(平元卒)

新規採用教員として、平成元年に、川之江市立南小学校(現・四国中央市立南小学校)から教員生活をスタートし、気付けば三十六年目を迎えている。いつの間にか役職定年まで残すところ二年となった。

異動激しき三十六年間

三十六年間で、私の異動回数は十四回を数える。若い時は「なぜ、学校を変わらなければならぬのか。何か自分にまずかったところがあったのか。もっとやりたいことがあったのに……」と、心ならずも不満を周りにぶつけ、迷惑を掛けたこともあった。一校に最長でも五年間の在籍。一年人事も複数回。そんな異動の多さにも、いつしか良さを感じる事ができるようになっていった。何事も自分のとらえ方や考え方次第である。しかし、いざ転任となると、エ

ネルギーのいるものである。決して人付き合いが上手とは言えない私には試練であった。そこで、転任したら、①とにかく挨拶をすること。(すべてに通じる基本である)②とにかく、学校のどこに何があるかを把握すること。(すぐに行動できるため)③とにかく全校児童に名前を覚えてもらうこと。(自分の存在を知らしめる)この三つを積み重ねると、三年後には、周りの人から見ると、長年いるような雰囲気を出し出しているように見えたようである。

また自分は異動が早いという自覚から、いつ転任してもよいように、一年を大切にしながら教育活動を意識していた。とにかく一年勝負が基本であった。

出会い多き三十六年間

学校が変わることの良さは、新たな出会いが生まれるということである。数多くの教職員との出会いは、私自身の成長に繋がっている。教師としての指導力はもちろんのこと、人としての魅力を感じる先輩や同僚にも恵まれた。

今は、管理職として日々悪戦苦闘しているが、そもそも、管理職を目指す気持ちもその器もなかった。生涯学級担任として子どもと関わりたいという気持ちが強く管理職試験にも前向きではなかった。そんな折、ある校長先生から「自分は管理職として働いているのは、自分を育ててくれた先輩方への恩返しであり、それを引き継いでいるだけだ。おまえにも、それを望むよ」と、助言をいただいた。その言葉に、自分自身も腹をくくることができたことを今でも覚えている。

人との出会いは、教職員だけで

はない。学校が変わると、関わりを持つ地域も変わる。それぞれの地域の方や保護者との出会いは、本当に素敵なものである。特に、新居浜市は、県内でも早くからコミュニティ・スクールを導入しており、地域の方との関わりも深い。それは、学校・家庭・地域が一体となった教育活動へと結びついており、私自身の人との結びつきにも繋がっている。

多様な学校で生きた三十六年間

「生きた」という言葉を使っているが、「生かされた」という言葉が適切であろう。数多くの学校に勤務してきたが、どの学校も特色ある学校であった。私の自慢の一つとして、勤務時代に愛媛県内で一番児童数の多い学校(中萩小学校)と一番児童数の少ない学校(別子小学校)に勤務したことである。ちなみに別子小学校の人数は全校二名であった。一、〇〇〇人以上の大規模校での体育主任。僻地小規模校での教務主任。その経験は、今の私の宝物であり多様な経験が自分を成長させてくれた。

違った視点に立つと、前述のように新居浜市は、コミュニティ・スクールが早期に導入されたところである。私の勤務した学校は、その中でも、取組が確立し、発展している学校が多かった。

教頭・校長の両職で勤務した垣生小学校では、食農教育を中心としたCS活動を推進した。学校敷地内への畑の造成をはじめ、教育活動への位置付け、活動計画のシステム化を行うことにより、教職員への負担の軽減を図り、スムーズな実践へと結び付いていった。現任教である泉川小学校は、新居浜市でも一番初めにコミュニ

ティ・スクールを導入した学校である。一小一中の校区であり、小学生は全員泉川中学校に進学する。その良さを生かし、小中合同のコミュニティ・スクール活動が推進されている。本校には、「コミュニティ・スクールガイドライン」があり、学校の担う役割、家庭の担う役割、地域の担う役割を明確にしている。それにより教職員は安心して教育活動に専念できるような環境が作られている。本当にありがたいことである。

喜び多き三十六年間

教諭時代に、唯一継続できたものが一つだけある。それは、六年生を担任した時には、卒業時に必ず色紙を贈ったことである。六年生を担任することが多かったため、その色紙の数は合計四〇〇枚を超えている。オンリーワンである自分の花を咲かせてほしい願いから、卒業式前に子ども達の顔を思い浮かべながら一人一人に違った花の絵や言葉を考えて制作していったことは鮮明に覚えている。

大人へと成長した卒業生と出会ったとき、その色紙を大切にまだ持っているというのを聞くと、本当に幸せを感じる。先日、教員となった教え子が、「今六年生の担任です。先生がしてくれたことのような取組をできたらと頑張っています。」というような声を掛けてくれた。教員の喜びは、その当の子供との関わりから生まれる喜びとともに、数年後、数十年後の再会時の新たな喜びがある。それは、教員という職業の大きな魅力であろう。

今後、多くの出会いを大切にしながら残りの数年間を全うしていきたい。

教育学部の授業紹介……………(10)

先輩を偲ぶ……………(11)

「あしあと(11)」先輩たちのあしあと……………(11)

同窓会事務局

会員の声……………(13)

・「フランス・パリ」……………井手 理

・「教育とは何か?」……………

『「正定聚」について』……………吉原 宏文

表紙のことば……………(17)

・「入院生活雑感」……………阿部 修一

同窓会支部長会報告……………(20)

役員表……………(21)

事業・決算報告……………(22)

同窓会会則……………(23)

支部活動支援金交付要綱……………(24)

同窓会懇親会案内……………(25)

大学構内及び教育学部の現在……………(26)

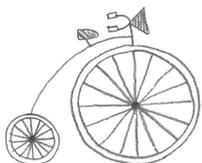
放送大学入学生募集のお知らせ……………(27)

事務局からのお知らせ……………(27)

敬申・寄付者名……………(28)

裏表紙……………(29)

会員写真館……………(29)



職場だより



教師になつて



四国中央市

川之江小教諭

石川 真有

(令五卒)



私が学校の先生になろうと思つたきっかけは、中学校のときの担任の先生との出会いでした。その先生は、どんなことにも一生懸命で、授業がとても面白く、悩んでいるときに寄り添ってくれる先生でした。いつか、そのときの先生のようになりたいと思うようになり、愛媛大学、小学校サブコースに進学しました。

愛媛大学に入学し、特に印象に残っていることは、三回生のときに参加した教育実習でした。教育実習では、六年生を担当することになり、学級経営について学んだら、授業づくりに励んだり、同じ教員を目指す仲間とともに、充実した一か月を過ごしました。実習を通して、学級経営や授業づくりの難しさを実感する日々でしたが、それでも子どもたちと関わることの楽しさを感じ、小学校の先生になりたいという思いを強く持ちました。そして、愛媛県の教員採用試験に臨みました。

愛媛大学を卒業後、四国中央市立川之江小学校で勤務することに

なりました。地元、四国中央市で夢だった小学校の教員になることができ、とても嬉しかったことを覚えています。期待に胸を膨らませて迎えた四月。私は、四年生の担任となりました。初めて出会ったときの子どもの表情や子どもたちの前に立ったときの緊張は今でも忘れられません。四月から怒涛のように過ぎていく日々でした。実際の教育現場は理想とは

ほど遠く、現実はその簡単にうまくいきませんでした。全てが初めてのことばかりで、一人で学級を育てるのかどうか、この先やっつけいけるのかどうか、不安で押しつぶされそうになることもありました。そんな時に、私の心の支えとなったのは、クラスの子どもたちでした。私のクラスは、三十一人で、色々な特性を持った子がいます。個性に溢れ、素直で明るく、何事も一生懸命取り組む子たちばかりです。私が困っていると進んで手伝いをしてくれたり、昼休みに一緒に遊ぼうと声を掛けてくれたりと、子どもたちの姿に毎日、元気をもらっています。また、日々、成長していく子どもたちの姿に、自分ももっと成長したいという思いを強く持つことができました。子どもたちと一緒に成長できた一年になったのではないかと思います。

心の支えとなったのは、子どもたちだけではなくありません。同僚や家族、大学時代の友人など、たく

さんの方に支えられてこの一年を乗り越えることができました。大学時代からの友人とは今も連絡を取り合っています。相談に乗ってもらったり、語り合ったりするなど、友人も頑張っているから私も頑張ろうと思わせてくれる、とても大切な存在です。

たくさんの人に支えていただいたこの一年、忙しい毎日ですが、子どもたちの笑顔に元気をもらえたり、子どもたちの成長を近くで感じる事ができたり「できた」「分かった」という言葉を言ってくれたり、教員になって良かったと思うこともたくさんあります。そして、この一年間で学んだこともたくさんあります。

その中でも特に、大切だと思うことが三つあります。まず一つ目は、学級経営です。学級経営といっても、日々の授業だけではありません。児童理解や、教室掲示、生徒指導など、学級経営の中にも様々な仕事があります。「楽しく勉強したい」という思いや、「自分を認めてもらいたい」という思い、「友達と仲良くなりたい」という思いがあります。一人ひとりの思いに気付いて受け止めることを意識しながら、学級経営を行っています。また、学級経営は、子どもたちとの信頼関係を築いたり、日々の授業づくりを行ったりするうえでとても大切であることを学びました。

二つ目は、報告・連絡・相談をすることです。学級には、様々な特性を抱えた子どもたちがおり、毎日のように子どもどうしでトラブルが起きます。どんな小さなトラブルでも、子どもたちの話を



よく聞き、解決に向けて動くことが大切であることを学びました。私は、トラブルが起こった際に、一人で抱え込んで、解決しようとしてしまうことがあります。しかし、深刻な問題になる前に、どんな小さなことでも、相談や報告をすることが大切であることを常に心の隅に置いておくようにしています。

三つ目は、授業づくりです。毎日、授業をする中で、自分が納得できるような授業を行うことができていません。子どもたちの反応が薄かったり、日々、もっと、こうすれば良かったのではないかと思ったりすることがたくさんあります。先輩の授業を見せていたり、初任者指導の先生に授業を見ていただいたりする機会がたくさんあり、自分の課題をたくさん知ることができました。研究授業も三回行いましたが、一回一回の授業を大切に、どの授業もしっかりと目標を持って取り組みました。最後の研究授業ということもあり、特に道徳科の授業がとても印象に残っています。学年の先生方にたくさん助けていただき、今までいただいた助言や課題

を意識しながら授業を行いました。その中で、一つ一つの発問にしっかりと意味を持たせることが大切であることを学びました。課題はまだまだあるので、板書の仕方や発問の仕方、子どもとの関わり方など、日々の授業に生かしていきたいです。

今後、大切にしていきたいことが三つあります。まず、一つ目は子どもたちが安心でき、楽しいと思える学級にすることです。そのため、子どもたちとの信頼関係を築いていかなければなりません。子どもたちの小さな変化を見逃さないように、一人ひとりとしっかりとコミュニケーションを図っていきたいです。二つ目は、魅力的な授業づくりを行うことです。いろんな先生の授業を見せていただいたり、教材研究に力を入れたりし、自分から学ぶ姿勢を大切にしていきたいです。子どもたちの目が輝くような授業を目指していきたいです。三つ目は、様々な人との出会いを大切にすることです。色々な人がいて、様々な考えがある中で、たくさんの人から教えてくださったことを自分の中に吸収して自身の学級経営や授業に生かしていきたいです。

たくさんの人に支えられてこの一年間乗り越えることができました。これから少しでも恩返ししていきたいです。そして、人との出会いを大切に、初心を忘れず、学び続ける姿勢を大切にしていきたいです。一年間を終えて、たくさんの学びがありました。学んだことを生かし、子どもたちが安心できるような先生になれるようにこれからも日々、精進していきま

卒 業



新居浜市 船木小教諭 岩城 梨奈 (平三〇卒)

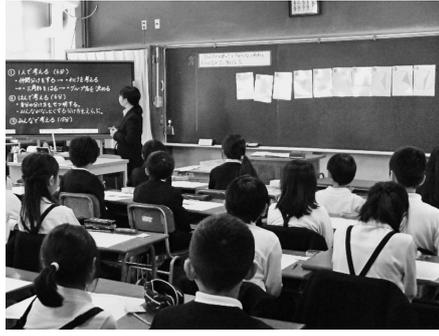
私が教師を目指したのは、小学生の頃である。小学二年生のときの担任の先生が大好きで、生き生きとした表情で授業をする先生が忘れられず、「私も小学校の先生になりたい!」と思い始めるようになった。母と地元が一緒だったこともあり、現在も手紙のやりとりを続けている。約二十年のときを経て、憧れだった先生になったことを報告。ショートメッセージで約三時間も仕事の話をした。愛媛県外で勤務しているため一緒に働くということは難しいが、ずっと憧れだった先生と同じ職業になれたことに喜びを感じている毎日だ。

愛媛大学を卒業し、はや五年。新規採用で新居浜の地に足を踏み入れて、すっかり新居浜での生活にも慣れてきた。

いまだに忘れることができない、新規採用一年目。新型コロナウィルスの影響によって、突如終わってしまった学校生活。初めて受け持った子どもたちと、ちゃんとお別れができないまま終わってしまったことは、とても悔しさを感じていた。しかし、その突然の

別れがあったからこそ、私の中で決めたことがある。それは、「一日一日を大切に、子どもたちと向き合うこと」「子どもたちと過ごす時間を一杯楽しむこと」である。子どもたちの小学校生活の貴重な一年に携わるからには、子どもたちに「楽しい一年だった!」「来年も頑張るぞ!」と思ってもらえることが何よりも幸せなことである。そのために、今、自分ができることは何があるのか、毎日頭をフル回転させながらせわしく動き回っている。

新型コロナウィルスによる休校という波乱万丈の幕開けから始まった教師生活。新居浜市立金子小学校で過ごした三年間は、コロナと共に過ごした制約のある中で、学校生活だった。数々の行事の中止、距離を最大限にとった机の配置、給食は黙食など、子どもたち同士が関わり、触れ合う機会がほとんどなくなっていた。全員、仕方のないことだと分かっていた。マスクの下の子どもたちの表情は



情は以前よりも暗く、寂しさを感じているような気がした。そんな子どもたちの様子を見ていたからこそ、直接触れ合わなくても、仲を深めることのできる活動はないか、ちよどタブレットも導入されたため、距離を取りながら仲間づくり活動はできないか、自分も新たな視点で勉強する良い機会となった。

この初任三年間で過ごした日々はとても濃いものとなった。子どもたちとの出会いはもちろんのことだが、自分が小学生だった頃、大の苦手だった国語を、大人になって、教師になって、教えるのが楽しいと気付かせてくれた先生との出会いも私にとつてかけがえないものである。右の写真は、休校前に行った、第三学年国語科「モチモチの木」の研究授業の一場面である。おくびょう豆太が、腹痛のじさまのために医者様を呼びに行く場面だ。教室全面に黒いゴミ袋を貼り付け、真っ暗な夜を表現。ランプのわずかな明かりと

子どもたちの役割演技で授業の前半があつという間に終わった。今まで指導書通りに進めてきた物語文のときと子どもたちの反応が全く違い、子どもたちは生き生きとした表情で役割演技に取り組み、休み時間にも熱心に練習していた。後ろに多くの先生たちがいるにも関わらず、「やりたい!」という気持ちがいっぱいの挙手であふれていた。楽しんでいる子どもたちの様子を見て、私も初めて国語が楽しいと思えた瞬間だった。子どもに身に付けさせたい力ははつきりと持ちつつ、子どもたちの「やりたい!」という思いを取り入れていくことで、子どもたちの学習意欲は全く違うものになることを感じた。自分にはない、子どもたちの柔軟で自由な捉え方を聞くことができる国語が大好きになった。同じ学年でも、年度によって全く違う意見が出てきて、それもまた面白い。数学の教員免許を持っている私が、まさかこんな国語が大好きになるとは、大学時代には思ってもいなかった。この「モチモチの木」の学習をきっかけに、私の国語の教材研究熱が高まり始めた。

そして、初任三年間を終えて、初めての異動。市内の中心部から、山の方へ。初めての異動は、初任のときの右も左も分らない、そんなときを思い出すような感覚だった。校舎内も全然違う。また一から覚え直した。そんな初めての異動に加えて、初めて特別支援学級の自閉症・情緒障がい学級の

担任になった。三年年にまたがる五人の子どもたちに、同時に勉強を教えていく大変さや難しさを感じながら、子どもたちの気持ちに落ち着かないときの対応の仕方を探り、私も日々勉強した。二年間の特別支援学級の経験を通して、子どもたち一人一人が抱えている課題に対して、どのように支援していけばよいかを考え、行動する大切さを改めて感じた。在籍人数が少ない分、子どもたちと向き合う時間も増えて、次第にコミュニケーションが取れるようになっていくことが私もうれしかった。そんな五年間の教師生活が過ぎて六年目を迎えた今。二年ぶりに通常の学級の担任になった。初めての六年担当だ。最高学年ということもあり、六年の子どもたちに任される仕事が多い分、私自身もいつも何かの行事に追われている。昨年度の約五倍の人数。まるで私の心を表すかのように、教室がぎゅうぎゅうだ。そんな私は、今年九月の学力向上研修会の授業者になっていく。教科はもちろん、国語だ。同時にキャリアアップ研修の年だ。一年間一杯国語の研究に取り組みることができる。コロナ禍の大変さとはまた違った大変な一年になることが予想されるが、いろいろなことに挑戦できると思うとワクワクしてくる。初心を思い出しながら、毎日自分も成長していきたい。そして、三月二十四日の卒業式で子どもたちと一緒に、胸を張って先生六年生を卒業する。

教師になつて



今治市 朝倉中教諭 前田 知希 (令四卒)

私は小学生の時から「何かを伝えられる人」「何かを教えられる人」になりたいという思いを持ち、教師になることを志していました。しかし、高校生までは、「なれたらいいな」というくらいのざっくりとした目標でした。そのような中で愛媛大学教育学部に進学し、そこで同じように中学校の社会科教員を目指している仲間に出会いました。その仲間と共に学び、「面白い授業ができるようになりたい」「生徒の成長に関わりたい」という気持ちが強くなりました。そして、教育実習、教員採用試験を経て、今治市立朝倉中学校に赴任することが決まりました。赴任先の連絡が来た時には、不安よりも、期待感とワクワク感が大きかったのを今も覚えています。

いよいよ教員生活一年目がスタートするという中で、私の大きかった期待は大きな不安へと変化しました。その理由は、社会科の先生が自分以外に一人もいなかったからです。講師経験もない私にとって教師一年目から三年生全ての授業を担当することは、不安でしかありませんでした。授業が始まってからは時間との戦いでした。十分な教材研究ができず、納得のいかない授業を行わなければ

ならない現実には、生徒たちに対しての申し訳なさや悔しさでいっぱいでした。そのような中でも無事に頑張り続けることができたのは、たくさんの支えがあったからです。授業については、社会科の専門的な内容について学校内で相談することができなかったため、週に一度来てくださる初任者指導の先生に相談しました。また、他の学校の先生ともつながることができ、授業を見学させてもらいました。そこで、社会科という教科の特性を踏まえた効果的な教え方や授業の組み立て方などを学ぶことができました。また、指示の出し方や生徒とのコミュニケーションの取り方などは、校長先生、教頭先生をはじめとする管理職や先輩の先生方が丁寧に教えてくださり、生徒との向き合い方や授業に大切なことを学ぶことができました。このように、たくさんの苦勞と学びがあった一年目でした。この経験を通して、「生徒にとって分かりやすい授業とはどのような授業か」「関心を惹きつける授業とはどのような授業か」などを考え、実践し、少しずつではありますが、成長することができたと思います。

そして、二年目を迎えた時、私は初めて学級担任になりました。担当は一年生でした。教師としての一年目は教科指導に悩み、たくさんの時間を授業づくりに費やしましたが、二年目は学級経営の難しさを実感しました。生徒に私の思いをどのように伝え、生徒からの思いをどのように聞き取ればいいのか考え、私は三つのことに力を入れました。一つ目は、毎朝の教室での日課です。毎朝、生徒が来る前に黒板にメッセージを書き

ました。昨日あったこと、今日頑張ること、最近気になること、みんなに取り組んでほしいことなど、たくさんの話を毎日書き続けました。教師の自己満足になってしまいかもしれないという不安もありましたが、それでもいいと思います。毎日書き続けました。そうすると、生徒の中には、「今日、先生が書いていたことは自分のことだと思った。だから、直さんといけん。」ということを書いてきてくれる子もいました。私のメッセージを読んで、一人でも自分の生徒がいるのであれば続けようと思えました。教師生活三年目に入った今でも続けています。二つ目は、朝の会と帰りの会での「先生のお話」です。最初は何を話すべきなのか悩むことも多かったですが、先輩の先生からもアドバイスをいただいたながら、「短く」「分かりやすく」を意識して伝えました。朝の会は、今日一日で意識してほしいことや取り組んでほしいことを伝え、その日に生徒が頑張らなければならぬことを考えさせ



せました。帰りの会は、朝の会で伝えたことの振り返りや、明日に向けての準備の話などをしました。最初はあまり効果を感じられず、生徒は私の話をそんなに聞いていないと思っていました。しかし、二学期、三学期と時間が経つにつれて、私が話したことを意識しようとする生徒が増えてきました。そして、教師三年目の今年には、話したことを頑張ろうとする生徒が更に増えました。三つ目は教育相談です。朝倉中学校では、毎月全員の生徒と学年部で協力して教育相談を行います。何かしんどいことや困っていることがないかきめ細かに聞き取ることが目的ですが、私はこの時間をとても大切にしました。困っていることだけではなく、最近頑張っていることや学校生活の何が楽しいのか、生徒のその時の状況をたくさん聞くことを意識しました。そうすると、生徒は今の自分が思っていることを素直に話してくれました。中には「前田先生との教育相談は長いから嫌だ(笑)」などと言う生徒もいましたが、何か月かに一回だけの一対一の話をしました。生徒ともたくさんの話をしました。生徒の思いを聞くだけでなく、私がその生徒にどうなつてほしいと思っているか、なども言葉にして伝えました。私の思いを受けて少し行動が前向きに変わる生徒や、「あの時の話の続き」と言って自分から話しかけてくれる生徒などもありました。この三つのことに特に力を入れて取り組み、私の思いを伝え、生徒の気持ちを聞くことをしてきました。もちろん、授業中や部活動など、他の場面でも生徒と関わろうとたくさんの場面で

してきました。時には失敗もあり、生徒とぶつかり、意見を言い合う場面などもありましたが、そのような経験も経たからこそ、少しずつですが、生徒と信頼関係が築けてきていると思います。このように教師二年目は学級担任として、生徒と向き合った一年間でした。一年目とは違う難しさがあり、戸惑う場面も多かったですが、担任としての楽しさ、面白さというものを実感した一年間でした。そして、今年三年目を迎え、昨年と同じクラスの生徒を担当することになりました。一クラスしかないため、クラス替えがありません。始業式の担任発表の際には、生徒の「やっぱりな」という顔と同時に、安心した顔を見ることができ、私自身も少しホッとしました。そして昨年度以上にこの子たちと関わり、成長を見たいという気持ちになりました。今も朝の会などの学級の時間や授業、休み時間など、たくさんの場面で生徒と関わり、時にはほめ、時には叱りながら、生徒の成長を見守りたいと思えました。このように、充実した二年間を送り、希望に満ちた三年目を迎えることができているのは、たくさんの人に支えられてきたからです。教師として右も左も分からない私に、生徒指導や学級経営など、たくさんのことを教えてくれた先輩の先生方、多くの場面で協力し、助けていただいた保護者の方々、そして、毎日成長を見せてくれる生徒たちに支えられ、教員生活を送ることができています。これからは誰かを支えていくことができるように、人として、教師として生徒たちと共に成長していきます。

全力で楽しむ生活



松山市 桑原小教諭 山口 彩夏 (令二卒)

私は日々の生活でいかに楽しめるかを考えて生きています。「今日はどんな給食があるかな」「子どもが喜ぶようにどんな仕掛けができるかな」「次どこに旅行へ行くのかな」そんなことを考えています。そして、それは自分だけでなく子どもたちに対しても同じで、学校生活を楽しく送ってほしいと願っています。そのために私が教員になって行ったことや考えたことを紹介します。

まず一つ目は、「とにかく遊ぶ」ことです。教員になって四年間、ほとんど毎日昼休みは校庭へ遊びに出ています。愛媛大学教育学部附属小学校で教育実習を行った頃はスーツで走り回り、スカートが破れてしまったこともありました。以後、必ずズボンを履くことにしています。思い切りかけてズボンが破れたり、おいしい給食をたくさん食べた後ですぐ走るのでもありますが、毎日健康に過ごしているのは、全力で遊んでいる昼休みのおかげだと思います。六年生の担任が決まった時「今年はあまり遊びに誘われなかな」「外遊び少ないだろうな」と不安に思っていました。しかし、「たくさん遊びましょう」と初日に宣言

すると毎日子どもが遊びに誘ってくれるようになり、短い時間でも子どもたちと遊びに行き、汗を流しながら授業をすることもありました。卒業が近付く三学期になると、お楽しみ係の声掛けで毎日全員遊びがあり、いつも昼休みには教室が空っぽでした。全力で走り回ったり、ボールを投げたりする子どもたちの元気な姿は幸せそのものでした。子どもと外で遊ぶことは、私にとって本当に楽しい時間です。共に遊ぶ中で、子どもの意外な一面を見られたり、悩みを聞けたりするので、学級経営をする中でも大事な時間と思っています。いつも「先生鬼ね。」と言われますが、これからも動ける限り全力で続けていきたいです。加えて私生活の充実も図っており、休日も全力で遊んでいます。押し活をしたり旅行に行ったりしてリフレッシュをしています。休まず遊ぶことが私にとって仕事のエネルギー源となっています。これからも公私ともども全力で遊び尽くしたいと思っています。

二つ目は、「とにかく笑う」ことです。前任校の椿小学校も今の桑原小学校も職員室がすごく明るい雰囲気、笑いが溢れる学校だと感じます。一日の楽しかったこと、失敗したこと、少しイライラしたことなど、どんなことでも先生方と職員室で話す中で、いつか笑い話に変わっています。社交的で樂觀的な性格の私は、職員室でもたまに「声が大きすぎる」と言われることはありますが、子どもたちにも先生方にも笑顔を広げたいと思っています。数年前の愛媛国体のキーワードは「愛顔(えがお)」でした。人と人の助け合い、支え合いの根底には「愛」があり、困難にくじけることなく挑戦し、道が開けた時には「笑顔」がこぼれます。「愛」と「笑顔」が結ばれて生まれたのが「愛顔」というようにこの言葉を知りました。私も「愛顔溢れる学級や学校にしていきたい」として、その発信源として自分はいっつも「人を大切に、笑顔で楽しく生きたい」と改めて思います。

三つ目は「とにかく挑戦」ということです。挑戦する中では失敗することもたくさんあります。しかし、できなかったことができた時の感覚、新しいことに向かっている時のワクワクする感覚、新たな世界が広がる感覚、どれも楽しい感情だと私は思います。大学生の頃は様々な実習に行かせていただいたり、アルバイトをしたり、旅行をしたりしてたくさん体験をしました。そして、働き始めてからの学校現場での体験は、確かな経験になり、他では手に入れないものだと感じています。前任者の一年目は失敗ばかりでした。授業をしても手応えがなく、学級経営もうまくいかず、正直「教室へ行きたくない」と思ったこともあり、しかし、たくさん挑戦し失敗したからこそ、二年目からはうまくいくことが増え、「子どもたちに会いたい」「授業をしたい」と思うことも増えていきました。やっと私らしい学級経営の「型」ができた頃に異動となり、初めての六年担任になりました。またいろいろなることが一かたらになりましたが、子どもたちや先生方と共に挑戦の気持ちで過ごしました。「どうしたら楽しいかな」「どうしたらうまくいくかな」と一緒に考えながら、えながら、たくさん学校の行事に取り組みしました。コロナ禍を経て四年ぶりに復活した運動会での応援は、子どもたちが試行錯誤しながらも楽しい活動を目指して取り組んでいました。他にも、八の字跳びの連続跳びに挑戦したり、ギネス記録にチャレンジしたりと、子どもと多くの体験をすることができ、とても楽しい一年間になりました。



また数多くの「学びの挑戦」も行ってきました。教員採用試験を受ける頃、「学び続ける教員になりたい」といつも思っていました。その言葉が嘘にならないように日々学習をしています。六年生では苦手な歴史を教えるなければなりません。時間をかけて教材研究をし、日々の授業に臨みました。私の一言一言に反応してくれる子ども、ノートをとる子どもが増えました。三月に行ったアンケートでは、多くの子どもが「歴史の授業が分かりやすかった」「社会の授業が一番好きになった」と答えてくれ、多くの時間をかけた分、子どもたちと「分かる・楽しい」を共有できたのだと実感しました。また、大学生の頃には理系でありながらも一番苦手な国語科を専攻して勉強をしました。教員になった今も、国語の授業は苦手ですが、大学連携セミナーに参加したり、研究大会に参加したりして勉強を続けています。様々な方法を試す中で、「国語って奥が深く、授業のやりがいがあるな」と感じてくるようになりました。今後は国語の研究も深めていきたいです。子ども主体の授業を目指し、学び続けることは私にとって授業の楽しみになっています。そして、教師が楽しむことで、きっと子どもたちも楽しく授業に取り組むことにつながっていくのだと信じています。

『人生は楽ではない。そこが面白いとしておく。』武者小路実篤の本のタイトルがありますが、これを置き換えて「人生は楽ではないが、楽しい」という言葉を昨年度卒業生へ送りました。私のこれまでの人生は二十七年間。教員生活はその中でまだ四年間。短い時間ではありますが「楽しい日々」と感じています。毎日笑顔で働くことができていて、私生活もとても充実しており、いろいろなことに挑戦できている人生です。もちろんそれは私だけでできることなく、たくさんさんの人の支えがあってからこそということを理解しており、本当に感謝しています。これからは支えてくれるすべての方への恩返しと、これからは生きる子どもたちが「楽しい人生」を送れるように、教員としてできることを全力でしていきたいと思っております。そして私自身も、もっともっとうんと人生を謳歌していきます。

笑顔で 謙虚に
元氣よく



伊方町
三机小教諭
曾根 希美
(令五卒)

「草木の芽がはじめて地上に顔を出したが、まだ大気は寒く震えている運氣。今は力が不十分で何事も思うようにはいかずいささか焦りがちだが、少しずつ悩みや迷いが解消していき、やがて暖かい春の訪れがある。ここは実力を蓄える時。時を待て。」

これは私が教員一年目の冬に引いたおみくじの言葉です。初めてだらけの一年間。どんなに時間を掛けて教材研究を行っても、「うまくいった」と思える授業はありませんでした。どんなにこちらが熱意を持って指導しても、子どもの心に届かないこともありました。しかし、そんな一年間も決して無駄ではなく、全てがこれからの自分の糧になる。このおみくじの言葉から、そんな風に思うことができました。この原稿を書くにあたり、私が引いたおみくじに書かれていた言葉とともに、わずかな一年間ではありますが、私の教員生活を振り返ってみたいと思います。

私は愛媛大学を卒業し、四国最西端の岬にある、伊方町立三机小学校での勤務が決まりました。学校に着くまでに、メロデーライオンを通ります。雨が降った日には

霧で前が見えず、道中で獣を見かけることもあります。校区は、一面が海に囲まれた所から、山の中間まで様々です。そんな自然豊かな環境で育ってきた子どもたちは、好奇心旺盛で、知識も豊富です。高学年は、芋掘りで見つけた大きな芋を、当たり前のように低学年に譲ったり、低学年が片付けた不揃いな雑巾を、何も言わずに正したりと、年少者を慈しむ姿があります。低学年は、自分へ注がれた愛情や思いやりをきちんと感じ取り、それをまねて他者を思いやり、前に出て堂々と発表する高学年の姿を手本にして活動したりするなど、年長者を敬うような姿が見られます。

「足踏み状態で焦る気分をひとまず抑えよ。焦点を絞り直してかかれれば難局もかならず打開できる」。この言葉は、授業研究において役立ちました。「授業が面白い先生には、自然と子どもはついていく」という話を、本で読んだことがあります。どんなに慌ただしい毎日でも、どんなに疲れて帰宅しても、次の日の授業の準備はしっかりと行うことを意識しました。「そこに食いついてくるのか!」とツツコミを入れたくなるようなところに、子どもたちの興味を引き付けるヒントがあったり、はたまた一生懸命考えた授業に、子どもたちが興味を示さず、一人で悔し涙を流したりしたこともありました。「体育をちゃんと教える先生は潰れない」という話を聞いたこともあります。準備も片付けも一苦労ですが、必ず学校にある道具は全て出して活動しま

した。一輪車、跳び箱、マット運動、なわとび、子どもたちにできるよくなつてほしいことは、すべてお手本を見せられるように、放課後や休み時間に練習しました。拙い指導ながらも、一生懸命ついてきてくれる子どもたちの姿を見て、できるだけたくさん、この子たちの「できた!」を引き出してやりたいと思いました。しかし私はまだまだ未熟です。なぜ子どもたちができないのか分らず、一緒に悩むことが多かったです。そんな時に頼りになるのはやはり先輩の先生方です。跳び箱であれば助走、長縄であればタイミング。焦点を絞った、まるで魔法のような指導で、子どもたちはどんどんできることが増えました。どの教科においても、その授業でのねらいを定めることで、難しいことも簡単に理解することができ、分ける授業、楽しい授業へとつながるのだと実感しました。

「焦って事を運ばないこと」。この言葉は、子どもたちとの関わり方で役に立ちました。先に生きると書いて「先生」。教え、導くという意味の「教師」。大学時代の私は、教師とは、子どもが疑問に思ったことや困った時は助けてやらねばならない立場であると思っていました。しかしこの一年間は、私も分からないことばかりでした。だからこそ、不確定な情報を伝えたり、自分の主観や価値観で指導をしたりしないことを意識しました。「先生これってどういう意味?」と聞かれたら、「先生も分からんけん、一緒に調べてみよう。」と答え、子どもが

よくないことをした時は、「何がいけなかったか、どうすればよかったか、まずは自分で考えてみなさい。」と伝えました。どれだけの時間が掛かっても、自分のことは自分の頭で考えさせることを意識しました。三学期のある日、「のぞみ先生は、意味ないことでは怒らんけん。」という子どもの言葉を聞いた時、自分の思いが少しは伝わっているような、そんな気がしてとてもうれしかったです。

教員採用試験の面接で「どんな教師になりたいですか。」と聞かれました。今の私は、「謝れる教師」でありたいと思います。嘘をついてはいけません。人の心や体を傷つけてはいけません。約束は守りましょう。何かをしてもらったら「ありがとう」。そして、相手に迷惑をかけた時、悪いことをしてしまった時は「ごめんなさい」。この一年間で、子どもたちにはこのような声掛けを数えきれないほど行いました。しかし、子どもたちに指導をすることが多い日常であるからこそ、私自身がミスや勘違いをした時、つい言い訳しそうな自分がいまいます。そんな時こそ、自分自身が、子どもたちに育ってほしい姿に、そして、子どもが目標としてくれるような姿になれているかどうかを日々問いかけながら過ごしていかなければならないと強く思います。

「あなたは大切な戦力です」。これはおみくじの言葉ではなく、職場の先生方が掛けてくださった言葉です。小規模校であり、職員数の少ない本校は、校務分掌をはじめ、一人一人の教員に任される仕

事量がとても多いです。そんな中、右も左も分らない私は、必死に先輩方の後ろをついていく毎日でした。今年度から、本校は全学級が複式学級となりました。四十五分授業の中で、いかにして二年生の学習を指導するか。教材研究をする時間は昨年度の二倍、子どもに直接指導ができる時間は昨年度の半分です。校務分掌も片手では収まらず、慌ただしい毎日が始まりました。しかし、まだまだ二年目、初めてだらけの毎日です。自分に余裕がなくなった時こそ「笑顔」で過ごし、心にゆとりを持てるように。また、どんなことにも、どんな相手にも「謙虚」に向き合いたい、周囲から学べることをどんどん吸収していけるように。そして、子どもたちに負けないぐらい「元氣よく」過ごし、学校はもちろん、地域にも元氣を届けられるよう、教員二年目も努めてまいります。

量が多すぎると感じることもありますが、先輩方のサポートのおかげで、少しずつ慣れてきました。今年度は、一人一人の子どもに寄り添った授業をしたいと考えています。また、地域との連携も強化していきたいです。



尊 師



松山市
愛大教育学部
附属中教諭
兵頭 宣彦
(平一六卒)

愛媛大学教育学部を卒業して、二十年。今、縁あって教育学部附属中学校に勤めている。学生時代は、三回生時に四週間、この附属中学校で教育実習をさせてもらった。また、四回生時には、同級生と短歌の単元を構想し、実践する機会も与えていただいた。自分を育てていただいたこの附属中学校への恩返しだと思ひ、日々の研究・実践に取り組んでいる。

同窓会報ということなので、大学時代にお世話になった先生について話したい。在学中、たくさんの先生方にお世話になり、教師になるために必要なことを教えていただいた。その中でも、特に二人の先生方のお名前を挙げたい。

一人目は、三浦和尙先生である。三浦先生は、卒業後もずっとつながりを持っていただいている先生である。研究大会や公開授業でお会いするたびに、「よう、兵頭君！元気か！」と気さくに声を掛けてくださる。現場での実践を大切にしてください、いつも温もりある言葉を掛けてくださる三浦先生の周囲には、どの会でも人の輪が広がる。

三浦先生に教えていただいたことはたくさんあるが、今でも毎時間大切にしていることがある。それは、国語科は「教科書を学ぶ」

のではなく、「教科書で学ぶ」教科なのだということである。教材を扱う上で「その教材を学ぶことは、どのような価値があるのか」「その教材を学ぶことで、どのような技能が身に付くのか」「その教材を通して、どのような態度が身に付くのか」ということを考えることが大切であると三浦先生から学んだ。

この学びを得るまで、私は「教科書にあるから、その教材を学ぶのだ」と思っていた。しかし、教材を通して得られる価値・技能・態度について考える中で、「目の前の生徒たちに、このような力を身に付けさせたいから、この教材を用いて学ぶのだ」と理解することができた。教材を中心に据えて授業をするのか、生徒を中心に据えて授業をするのかで、大きな違いが生まれる。

さて、今では気さくに話し掛けてくださる三浦先生ではあるが、学生時代は怖かった。講義の中には「真剣な態度で取り組めないのであれば受ける資格はない。」という加減な課題や提出物なら出さなくて良い。「一生半可な気持ちで教壇に立つなんて、子どもに失礼だ。」というピリッとした空気が流れていた。あくまで「空気」である。三浦先生の口から直接出てきた言葉ではない。口にはきれないが、教師の心の持ち方や、あるべき姿について、毅然とした雰囲気でも教えてくださっているように気が付きかどうかわかはずに分らないが、当時も今も、三浦先生にお会いすると背筋が伸び、指先がそろう。私にとって、尊敬する偉大な師である。



二人目は、佐藤栄作先生である。佐藤先生は、言葉の面白さと奥深さを教えてくださった先生である。お会いすると、「兵頭君、今僕はね、こんなことに課題意識を持っているんだ。君はどう思う？」と質問していただく。もちろん私の口からは、佐藤先生のお考え以上のものは出て来ないが、先生はこやかな表情で、ふむふむとうなずき、ひと通り考えを聞いてくださる。その後、「先生は、どうお考えなのですか？」とお聞きすると、「そうなんだよ、僕はね……」と本当に楽しそうに、言語学や日本語教育について語っていただける。そんな先生のお姿から、言葉の意味や音韻、その変遷に疑問を持ち、探究することの魅力を感じていただいていた。

講義の中で特に印象深く覚えているのは、柳田國男の「蝸牛考」を取り上げた時のことである。「蝸牛」とは、「カタツムリ」のことである。この「カタツムリ」は、地域によって呼び方が異なる。しかも、西日本と東日本で呼び方が変化するという話ではなく、京都を中心に、同心円状に広がっているという内容だった。まるで「カタツムリ」の殻のようである。さらに佐藤先生は、「方言やイ

ントネーションも、独特な広がり方や変化をしているものがある。地域を巡って、それを調べるのも面白い。兵頭君、君の生まれ育った八幡浜市のイントネーションも、興味深いんだよ！」とおっしゃったのを覚えている。

知的好奇心をくすぐってくださった佐藤先生の講義に魅力を感じた私は、卒業論文を佐藤ゼミで書かせていただいた。テーマは、「言語活動場面に生きる文法教育の研究」。大作と呼ぶにはおこがましい代物だったが、文量はじわじわと膨れ上がり、原稿用紙三百六十枚に及んだ。佐藤先生でなければ、「まとまりがない」「君が本当に言いたいことは何なのだ」とバツサバツサと削られていったに違いない。しかし、佐藤先生はそんなことは一切言わず、探究したいことを思う存分学ばせてくださった。

佐藤先生には、学業だけでなく、プライベートのことも気にかけていただいた。大学二回生の秋、父ががんを患った。その時は、開腹手術で切り抜けることができたのだが、大学四回生の秋、今度はリンパ節への転移が見つかってしまった。

医師からは、「体中に広がっている可能性があるので、手術はできない」と言われた。わずかな希望にかけて、抗がん剤治療に入ることにした。面と向かつては上手く伝える自信がなかったため、生まれて初めて父に手紙を書いた。「一日でも長く生きてください。一日でも長く、僕の父でいてください。」
我が家は専業みかん農家であったため、秋から冬にかけてが一番

忙しい。収穫や選果、出荷があるからである。治療の間、父は仕事をすることができない。少しでも稼業を助けるため、月々金は大学で学び、土日は帰省してみかん山を手伝った。その影響から、卒業論文の進み具合は思わしくなかった。しかし、佐藤先生は決して急かさなかった。父の病状を心配してくださったとともに、私が疲れていないかをいつも気にかけてくださった。

その甲斐あり、父の抗がん剤治療は上手くいった。「術後何年生きられるか……」とつぶやいていた父は、二十年後の今、おじいちゃんソフトボールの八幡浜選抜チームで四番打者を務めている。本当にありがたいことである。
話がそれってしまった。

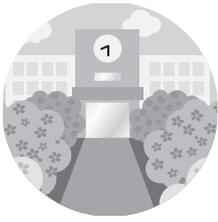
愛媛大学教育学部で御指導いただいた先生方のおかげで、今の自分がある。教えていただいたこと、親身になって関わっていただいたこと、育てていただいたこと、全てに感謝している。

私の目の前には、愛媛の未来をリードする優秀な生徒たちがいる。それぞれに得意分野があり、多様な価値観を持ち、個性あふれる生徒たちと学ぶ国語の授業は、本当に楽しい。また、私の学校には、愛媛の未来の教育をリードする、若い教師の卵たちが毎年実習にやってくる。熱意ある若者たちと、授業や教育について語り合う時間は、とても充実している。私が生徒たちや学生たちのためにできることは、微々たるものかもしれない。しかし、三浦先生や佐藤先生のように、下の世代の若者に一生懸命関わることによって、恩返しをしていきたい。

教育学部トピックス

令和六年度愛媛大学教育学部附属学校園入学式・入園式を挙行了しました

令和六年四月、教育学部附属学校園において入学式・入園式が挙行されました。今年度は、四校園いずれも式の日程が桜の満開時期と重なり、新入生は、桜の花びらが舞う中、在校園生及び教職員等から大きな拍手を受けながら会場に入り、式に臨みました。また、仁科弘重学長、小助川元太副学長及び日野克博教育学部長をはじめとする多くの来賓の方々にも臨席いただき、保護者が見守る中、温かい雰囲気にも包まれての式となりました。今後、新入生たちが附属学校園で健やかに成長し、勉学やスポーツをはじめ、様々な場面で活躍することを期待します。



附属中学校：入学式に臨む新入生たち



日野克博教育学部長による祝辞



附属小学校：上級生のエスコートを受けて入場する新入生たち



田中雅人附属小学校長による式辞



附属幼稚園：保護者に連れられて入場する新入生たち



仁科弘重学長をはじめとする来賓の方々



附属特別支援学校：在校生代表が新入生を迎える様子



櫻木暢子附属特別支援学校長による式辞

教育学部の授業紹介

今回は、教育学部福富彩子准教授が開講している教育学部三年生以上を対象とした授業を紹介いたします。なお、この紹介内容は愛媛大学HP掲載の「授業紹介1 Report」から一部抜粋したものです。

【授業内容】

この授業は、教育学部開講の、三年生以上を対象とした全十五回の講義です。令和三年度前学期の受講者は、教育学部学校教育教員養成課程中等教育コース音楽教育専攻三・四年生の計四人です。少人数のため、各自の目標や到達度に合わせたきめ細かい指導を受けることができます。前学期の前半の授業は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、遠隔授業（同期型）と、一〜二人に人数制限した対面授業の併用で行われ、また、例年は実施している器楽曲の伴奏や歌唱を含む活動は制限して実施されました。しかし、後半の授業は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止と学生の学修機会の確保とを両立する観点から、徹底した感染防御対策を取りながら、全員揃った対面授業やアンサンブル（二台ピアノ）を実施しました。

一 新曲視奏（初見視奏）

提示された十二小節ほどのピアノ新曲課題を一分程度見た後に演奏し、教員と楽曲の流れ、和声や構成について確認した上で、再度、演奏することを繰り返します。



ピアノの初見演奏能力は、身に付けておくべき必要な音楽技能であり、また、多様な場で活用できる応用力も育まれます。

二 キーボード・ハーモニー（和音付け）

提示された楽譜を見ながら、教員から和音付けについて解説を受けた後、即興で和音付けしながら演奏します。



バス・和音の定型（カデンツ）を覚えることで、旋律への基本的な伴奏付けや移調奏、また楽

曲構成や創作の基本も学ぶことができ、学校現場における音楽の授業が必要となる力を身に付けることができます。

三 中学校の歌唱共通教材七曲のピアノ伴奏の演習

中学校で取り扱う歌唱教材の伴奏を演奏、歌唱します。今回は、滝廉太郎作曲の「花」が課題でした。この演習を通して、教材研究やピアノ伴奏法の表現のあり方と、歌唱授業における実践的な力を身に付けることができます。



四 アンサンブル：二台ピアノによる演習

二人一組で課題曲を選んで曲し、様々な形態がある「合奏」のうち、二台ピアノでのアンサンブルを行います。



合奏相手との課題共有とその解決について、教員から助言を受けながら、二人での練習・合わせの観点や方法を実際に体験しながら学びつつ、表現力の向上を目指す演習です。

授業担当の福富彩子先生による、各受講生の目標や能力に合わせたきめ細やかな指導、また、その指導を真摯に受け止めて応えようとする受講生の意識と能力の高さに驚かされました。特に、歌唱教材の伴奏と、二台ピアノのアンサンブルは、自身の演奏能力の向上に限らず、相手とのコミュニケーションも必要であり、高度な能力を身に付けようと真剣に取り組む受講生の姿に感動を覚えました。本授業を受講することで、授業の目的にあるとおり、ピアノ伴奏能力を養うことのみならず、誰かと演奏を共にする喜びを感じることにより、コミュニケーション能力を高めることができると感じられました。

【教員からのコメント】

この授業は、学校現場や音楽教育の場で活用できるピアノ伴奏力とピアノを用いた指導力の育成を目的として開講されています。音楽教育の現場ではピアノを使った音楽指導が行われることが多いのですが、旋律に即興で和音やリズムを付けて演奏し、生徒に伝えなくてはならない場面も度々あります。そのようなことにも対応できるピアノ演奏力の向上と共に、ピアノを使って生徒とコミュニケーションする能力を高めるための実践的演習として、歌唱伴奏法、新曲視奏、キーボード・ハーモニー、二台ピアノや連弾、ひいてはピアノを含む器楽とのアンサンブルな

ど幅広い内容を含んでいます。

まず、中学校歌唱共通教材から歌唱伴奏法を学び、楽曲への理解を深めます。また、キーボード・ハーモニーでは和音進行をピアノで操れるようにします。この能力は、旋律への伴奏付けや移調奏にも役立ち、創作にも繋がるものです。

次の段階のピアノ新曲視奏では、演奏前に楽譜を見て頭の中に音楽をイメージします。これを「予見」といいます。予見時のイメージと、実際に演奏した音楽との差を縮められるよう演習を重ね、旋律や和声、調、フレーズなどの音楽的要素が統合されて認識できるようにします。

アンサンブルでは、合奏相手と呼吸を共有し、自身と他者との音の重なりを聴こうとする力も育成します。様々な形態の合奏の中で、今学期は二台ピアノに取り組みました。授業では、二人での練習で聴き合うポイントや、練習の方法等の観点を投げかけます。他者と協同して表現を模索する過程で新しい発見や気づきがあると、学びの動機付けにもなりますし、表現を共有できる喜びも音楽の魅力だと思えます。

こうした能動的演習で培われる力は、学校現場での実践で生かされるものと期待しています。



福富先生と受講生の皆さん



先輩を偲ぶ

あしあと (11)

先輩たちのあしあと

(教育学部同窓会百周年記念誌より原文のまま抜粋)



郷土の誇り、闇夜の鉄砲

愛媛県師範学校

白石

薫氏寄稿

(大正八卒)



回顧すれば、大正八年愛師二部を卒業した同期生は三六名であったが、現存している者は、わずかに七名で、いつの間にか物故されている。生来、衣食に無頓着な筆者が、今年四月で七九才の長寿を保ち得たのが自分ながら不思議である。強いて言えば達観と、感謝を生活の信条としてお陰かとも思っている。

逝去せられた諸兄を偲んで、心から御冥福を祈ると共に、感慨ひとしおのものがある。

ひるがえって本年、愛媛県師範学校が発足してから百周年を迎えたことは我々同窓生として御同慶の至りと思う。この光輝あるときに当って、標題のような感想を申し述べてみたい。

郷土の誇りと云ってはいささか、けた違いの存在であり、また異質の誇りといはねばならぬものは、享保の義人、義農作兵衛翁と、松前古城である。今から二百七十年昔の、享保の大飢饉に際し、筒井の農民作兵衛は、後年の農民のために、残り少ない麦種を抱きながら死去したのである。翁の事績については、大正十年十一月に発行された文部省の尋常小学修身書(定価一四銭)巻五の第十三課で、「勤勞」の徳目に詳細記述されて

いるので、当時の全国児童が学んでいることである。義農翁の銅像は昭和三十三年七月に建設せられたもので、「義農作兵衛翁」の台字は当時の知事久松定武氏の揮毫である。施工主は来島ドック社長坪内寿夫氏である。墓側にある頌徳碑には左記の文字が刻まれている。

維信維義 嚆志廻敦
死而不殮 垂裕俊旦
名教有補 龜鑑永存
大正元年十二月
法学博士 平田東助



最後に紹介しておかねばならぬ郷土の誇りは松前古城のことである。約三百年の昔、現在の松山市の表看板である松山城は、慶長八年城主の加藤嘉明が、松前地から現在の松山へ移城したものであり、いわば松前町は松山城発祥の地である。現今の筒井門は昔の名残りである。城跡に建立して



いる記念碑は松山市出身の陸軍大將秋山好古の題字、並びに撰文である。また松は本丸の庭に植えられた松の二代目である。初代の松は大正十一年秋、台風によって倒壊し、姿を消した。これは地上メートルのところまで直径一七〇センチで当時松前小学校の玄関脇に飾っていたが、今はいずこかに消えていったのだろう。

懷古松前城 白石窓山

春風秋雨四百年 追憶往時愕變遷
松籟肅然語今昔 逍遙城趾頻萬感
余生が短いためか、それとも耄碌の故か、冗長になって、申し訳ない。本文は標題のように闇夜の鉄砲で、当たらぬこともあつたかと恐れている。逆に下手な鉄砲も数うてば当たること真理である。何かの御参考にもなれば望外の幸せである。今後、愛媛大学教育学部同窓会の、ゆるぎなき発展と、会員各位の御健勝を祈る。



教育遍路

愛媛女子師範学校

正木ツヤ子氏寄稿

(大正一一卒)

○ 巢立ち

蜘蛛はほらに、鳥はねぐら、帰り急ぐこの夕、などとひとり、君は行くか、名残りおしのわが友……。四年間を共に暮らした同級生とのせつない別れ、涙声をふりしぼって歌って送ってくれた下級生、こうして思ひ出深い三津の女子師範を去ったのは、大正十一年三月であった。

ただちに四月、松山市高等小学校訓導に命ぜられ、四年間の義務年限をこゝに送ることができた。

○ 羽ばたき

当時の学校教育は、沢柳政太郎博士、小原国芳先生等の、ダルトンプラン教育に湧き上がった。愛媛では武田米蔵先生が主峰に立たれ、女子師範付属小学校ですでにその花を咲かせ、県下教育界羨望の的であった。私がそのダルトンプランの本城が見たくて飛び出したのは、大正一五年四月であった。

○ 成城小学校

そのころの成城小学校は、牛込の兵舎の跡、オンボロ校舎で、角部屋の一室の真ん中に大火鉢が置かれ、その周囲で教育論、調子が出る、小原国芳先生の、「ナア！ナア！」の呼びかけが飛び出す。

奥野・浜野・海老原・鷺尾の各先生、それぞれの論説、時には甲高い横槍など、まさにダルトンプラン教育の牙城ここに在りの、熱情と純粹さを示していた。まさしくこの時ばかりはこのオンポロ校舎もかがやいて見えた。最後には沢柳校長の「教育とは、世界にまたがる、いよ高く、深いものであらねばならぬ。」の説明で、ケリがつく。そのころはもう電燈があかかともり、夕焼け小焼けの武蔵野の空も、風と共に暮れていくのであった。私の若い心を燃やしつづけた成城小学校よ。

○ ロンドン

ところが、昭和九年四月、とつぜん鷺尾先生の電話で、「Y大使と共にロンドンに赴任される某氏の家庭教師としてロンドンに行ってくださいませんか」とのこと。受持ちは一年生のY君と、四年生のT子ちゃんである。私は瞬間、「ええっ」と驚いたが、ただちに「ハイ」と承知してしまった。あのころ大校長であられた故芥川準一郎先生が、「しっかり考えて返事なさいよ」とおっしゃって下さったことは今もよく覚えているが、これも、個人を相手とした家庭における本物教育の遍路行脚のいくさりと思っている。昭和九年五月、煙をはく香取丸で横浜をたち、故国を後にした。茫茫とはるけきロンドン。シンガポールを経、エジプト、カイロ、やがてロンドンと第二の人生の門出が始まった。こ

こにあること三〇年、ロンドンはまことに礼儀正しい英国の主都である。いたずらつ子もいたけれど、それでいて大らかで、折り目、切り目正しい国だと私は思う。日曜日は家族揃って教会に行く美しい祈りと反省、この国が、政治と経済と、そして教育と宗教の仲の善い国といわれるのを目のあたりに味わった。

○ 終着駅

昭和三九年九月、私は先輩横山尚代氏の紹介で、被昇天矩学園に入るようになった。愛と希望と喜びの神の愛を中心としてすべての教育をしているこの学園、私はこの学園をこよなく愛し、生きがいを感じている。私もただいま七〇余才、こゝらで私の教育遍路も終止符を打つであろう。

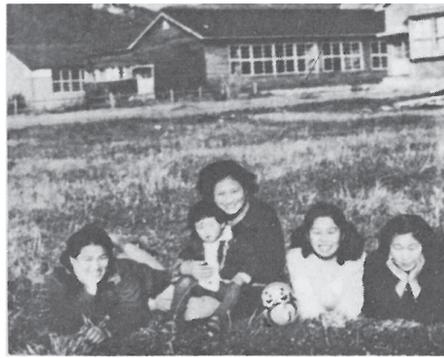
女一人、入学の記

愛媛大学教育学部

城戸 教恵氏寄稿

(昭和二八年)

昭和二四年の五月ごろではなかったかと思う、愛大の合格者発表があったのは。向学の志篤くなど他人様に錯覚されるのでほとんど困るのだが、学生というよい社会にいつまでもいたかったからというのが本音で、中途半端はいやだから、四年課程にと強引に両親を説得した手前もあり、合格を念ずる反面、女性の姿があまり見



られなかった入試のときを思い浮かべ、七歳ではなく九歳にして席を同じうしないで過ごしてきた私にとつて、女性の多い二年課程に自動的にくり入れられる不合格でもよいと思う部分もないではなく、複雑な気持ちであった。発表の日、教育学部合格者の一人一人を確かめながら女性らしき名前を探し、松本文恵氏には申しわけないが、女性であるよう一縷の望みをもった。しかし入学式の日その望みはあえなく消え、読みあげられる入学許可者に応答された声はまさしく男性、私はこの時教育学部でただ一人の女性であることを自覚させられた。文学部の自然科学科に一名、人文科学科に三名、教育学部に一名と総勢五名の女子であった。

終戦後四年、民主主義の政治体制もしいにととのい、男女同権、平等も婦人の参政権、男女共学その他いろいろな方面にかたちとなつて実現されてきてはいたが、私たちは新聞社の取材にあり、大学教育を受けた女性の将来像を描いて云々されたり、紅一点などといささか注目と関心をもたれる存在であった。そんな中で、私は男女別学であったことからくる学力差のこと、今まで距離をおかれていた男性ばかりの中でという皮膚感覚的な抵抗感など案じていた。

一般教養は文学部(現付属中学)で受け「中・キ・デ・コ・ヤ」即ち、中学部、工学部の機械・電気・鉱山・冶金の各科が合同で授業を受けるように組まれていたから、教室では、よほど受講生が多くないかぎり、私の前後左右一席ずつは、つねに空けられていた。有機化学だったか物理だったか失念したけれど「城戸君」「……」「キドキョウケイ君は居ないかね」文学部といっしょの授業で他にも女性があり、その人達にはさんづけであったから、とうぜん「城戸さん」を期待していた私は同性もいるのだなと思いついていたのであわてて返事をした。「あ々失礼、女性でしたか城戸さんですわ」しかし次の時間はまた「城戸君」キョウケイ君が出ない前に、ぐつと低音で「はい」。教育学部は現在、ぎゅくに女性の方が多くなつてしまつたから意外な感じのするこんなこともなつかしい思い出の一コマである。また教授側も女性の受構生の有無やようすなど、授業を終え

た研究室で披露しあつておられたそうであるし、雨夜の品定めならず、男子学生は寮や部屋で五人の品定めをやっていたよし、後年聞かされてみるとこれまた、なつかしい苦笑である。少々オーバーだが、非常に困つたのは体育で、ラグビー・野球・機械体操などに挑戦するにはあまりにも非力な私は、一人で教務課に女性向きの講座を開いてくれと交渉に行った。しかし、どう説得されたのか成功はしなかつた。

専門教養は家庭科を選んだが、こゝでもまた「一人」を考えさせられた。ほとんどが一对一の授業であったから、教えられる先生方も当惑されたと思うが、習う私も正直いつて緊張し、はじめのうちはくたびれた。でも、何よりも幸せだったのは、恩師との人間関係が一人のためにどの先生方とも深く、そして長いことであった。

今、第一養護学校で肢体不自由児教育に参加して八年。彼等にインテグレイションの必要を痛感したとき、まわりの理解の必要を感じたとき、見さかしくもなく説得してまわりたいような衝動にかられたりの、やや大勢からはみ出しているところも、「一人入学」の所産かとも思われる。

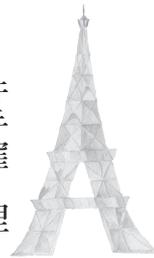


会員の声

フランス・パリ



井手窪 理
(昭三七卒)



一九八三年(昭和五八)、文部省派遣海外教育事情視察団二五名中の一員として、三〇日間の海外研修に行かせていただいた。

その一七日目、六月三日(金)午後二時、ドイツ・ルフトハンザからパリ・シャルルドゴール空港着陸。入国手続き。両替。四時、ホテル ホンタボー。ついに私たちは、パリにやってきた。

六月四日(土) 快晴 気温二八度 教育文化施設等視察 午前九時 ホテル出発

ホテルを一步出ると、どこでもカメラを向けたくなるようなパリの風景。古い伝統がそのまましっかりと根をおろし、守り続けられている。パリ市内全体はまさに一個の美術館である。

協調と平和を願って建設されたコンコルド広場に立つ。(写真①)
(今年二〇二四年のパリ五輪では、この広場で新競技のブレイキングなど都市型スポーツを実施)



写真①

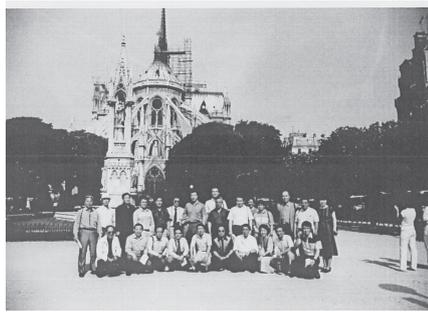
セーヌ川河畔を經由。パリのほぼ中央を東から西に流れるセーヌ川。(パリ五輪ではオステルリッツ橋を出発点としイェナ橋を終点として約六段が開会式の区間となる。ノートルダム大聖堂やルーブル美術館など世界的な観光名所をながめながらの船上パレードとなる。終着点はエッフェル塔前のイェナ橋で、選手らは船を下りて近くのトロカデロに集合、式典が行



写真②

われる。(写真②)

やがて、私たち一行は、ノートルダム寺院を見学。私の拙い語彙力ではそのすばらしさを表現しえない。ノートルダムは「パリ発祥」の地、シテ島に建っている。そして聖域をなしている。その大聖堂に私たちが入った時、ちょうどバイオルガンから聖歌が流れてきた。その荘厳さゆえか、今も思い出す。まるで私たちを迎え入れたかのような……。八五〇年もの間この聖堂は、フランス革命、ナポ



写真③

しかし、この大聖堂が大変な悲劇に遭ったのである。二〇一九年四月一五日、大火に包まれた。年間一、三〇〇万人もの観光客が訪れるパリを象徴する建造物の一つだった教会は、今にも崩れ落ちそうになった。
修復を巡っては、ガラス製の現代的な塔から屋上をプールのする構想までさまざまな案が出たが、



写真④

レオン戴冠式、世界大戦と国家が動く瞬間に立ち会ってきた。ヴィクトル・ユゴーの小説「ノートルダム・ド・パリ」にもこの建物はせむし男を守る聖域として描かれている。(写真③)
私は、翌日のグループ研修でも再びノートルダムを訪れた。塔の三七八段の螺旋階段を上り、頂上に立った。セーヌ川を真下にパリの町並みを一望した。その帰りに五種類の複製のパリの絵写真を買い、当時勤めていた上浮穴郡美川村立黒藤川中学校の生徒への土産とした。(写真④)

国を二分する激論の末、音響も含め元通りにすることが決まった。工事は二〇二四年一二月の完了に向け、順調に進んでいるそうである。一〇時四〇分。続いてルーブル美術館見学。一つの作品を三〇秒間見るだけでも八年間かると言われる。私は、「モナ・リザ」をしばらくながめていた。
しかし、子どものイエス・キリストとそのお父さんの絵。大工の父が夜仕事をしているとき、ロソクで明しているイエス。この絵を観たとき、私は思わず目頭が熱くなった。ちょうど、日本の私の家族のことを考えながら膨大な量の作品を鑑賞しているときだったから……。そして、私の祖父も大工であったから……。
モンマルトルの丘のふもと「ムーラン・ルージュ」で昼食。
一三時一〇分 モンマルトルの丘(海拔一三〇m)の上に立つ。サクレクール寺院、画家の広場(テアトル広場)、カフェテラス。建築物の規格は厳しい。洗濯物は外に干さない。看板は市の許可がある。シャンゼリーゼ通り(一、八〇〇m)、凱旋門経由、エッフェル塔(一八八九年建設)。
一六時 ホテル着。
黒人の露天商が多かった。違法なので警察官が来ると急いで逃げる。その速いこと。モンマルトルの丘では、一人つかまった。あわれであった。
夜、「RID」で、夕食をとり

ながら、ショーを観る。世界で最も有名なナイトクラブと宣伝するだけあって、底抜けに楽しく豪華なショーであった。世界中の音楽が流れ、世界の社交場といった感じだ。

本日のパリの昼と夜の見学料は、締めて六百フラン(二〇、四〇〇円)なりであった。六月五日(日) 快晴 気温二五度 さわやか 自由研修

九時三〇分 バスでホテル出発
ベルサイユ宮殿等見学である。
ブローニュの森を通り抜ける。

ベルサイユは、僧侶が開拓した。一六〇〇年に狩りのための別館を建てた。あの「朕は国家なり」と言ったルイ一四世が立派な宮殿にする。ルノートルが造園。ルブランが建築。ルポーが室内装飾。二〇年間、何万人もの人が働いた。ルイ一五世はポーランドより王妃をむかえる。ルイ一六世はオーストリアよりマリー・アントワネットをもらう。やがて、市民革命が起こり、ベルサイユ宮殿は廃居と化す。フランス政府が散逸していた家具類を買いもどし整備。一九八二年六月、ベルサイユ・サミットが開催された。現在も政府がこうした公式の会議に使用している。

一〇時、ベルサイユ宮殿着。日曜日なので特に大勢の見学者が入場の列をつくっている。私たちのガイドは大学生(文化人類学研究)でバカロレア試験をめざして

いる。並んで入場を待つ。日本人の新婚さんらしき人も多い。

いよいよ宮殿入り。王室礼拝堂。王は毎朝ミサに赴く。その時人々は請願。ヘラクレスの部屋(第四礼拝堂、ヘラクレスの神殿画)、ダイアナの間、軍神マルスの間、メルクリユスの間(水星)、アポロンの間(太陽)、鏡の間(一六〇の大広間)、戦争の間、ルイ一四世はローマ・ギリシア神話をもとに壁画を描かせた。ナポレオン戴冠式 平和の間、一日中太陽が照りつけヨーロッパの中心。王妃の御寝の間、マリー・アントワネットの使った部屋。王の部屋へも壁の一角から通じている。ここで御出産。マリー・アントワネットの子は三人。四人目の子は死亡。三人目の子(ルイ一七世)は一〇歳にて餓死。ナポレオンの間 ナポレオン戴冠式の間(ルーブル美術館にも同じ絵。ナポレオンは自分で王冠をかぶりバチカンと不仲破門などガイドの説明を聞きながら見学して回った。宮殿の中は大勢の見学者で込み合っていた。ガイドの声も日本語あり、中国語あり、ドイツ語あり、フランス語あり。

庭園見学。この広さ、明るさ、広場と池と森と。それらの空間の要所要所を占める銅像。
一二時一〇分ベルサイユ出発。かつて、馬車と馬の通った道。今、観光バスと車。大統領はヘリコプターで宮殿へ。

七月と八月は、パリジャンヌは南へ移動し、バカンスを楽しむ。その間、パリは一年中で一番静かになる。パリ市民は犬が大好き。道路には犬の糞が多い。外国人労働者が朝、清掃。最近では清掃車で清掃。フランスは水曜と日曜が休日。土曜日は半どん。美術館は水曜日は無料。日曜日は半額だそうだ。

午前中は、以上のようにバスを借り切って全員でベルサイユ宮殿の見学に出かけた。(写真⑤) 絶対主義時代の栄華を象徴する大宮殿。太陽王といわれたルイ一四世の絶頂期にその富と権力を結集して、二〇年の歳月をかけて完成したベルサイユ宮殿。古代様式を基として多種多様の大理石をふんだんに使い最高の華麗さをももっていた。



写真⑤

午後は、グループ研修。それぞれ思い思いにグループを組んで研修に出かけた。私たちはパリ市民

とじかに接することを楽しみ味わいながら散策をした。ホテルを出て、ルーブル美術館の中庭を通り抜け、セーヌ川沿いにノートルダム寺院の方に向かった。日差しは強かったが、木陰は涼しく、セーヌの川風は心地よかった。途中のどがかわいたので、カフェで冷たいものを飲んでみると、隣席の老婦人が話しかけてきた。オーストラリアの方だった。ルーブル美術館の中庭の芝生の上で、靴も靴下も脱いで、憩っている娘さんに話しかけると、カナダから来た大学生だった。(写真⑥) パリの四人の親子連れと水道の水を出し合っ



写真⑥

ノートルダム寺院の塔の三七八段の螺旋階段を上り、頂上に立つて、パリの町並みを一望した。このことは前述した。

帰りに少し早かったが夕食をとるべく、日本人が多く住んでいる通称日本人通りへ向かった。すると、その名のとおり、数人の日本



写真⑦

人の子どもにも出会った。松田聖子にサインをもらいに来たとのことであった。(写真⑦)

レストラン「OSAKA」に入った。そこで、まったく偶然にも私の家のすぐ近く(久万町緑ヶ丘 当時)に住んでいる菊池青年に会った。彼は彼の撮った写真のフィルムを両親に届けてくれたと言った。私は後日、帰国後そうした。世界は広いようで狭いとも思った。

一世紀ぶりのパリ五輪は、「広く開かれた大会に」と掲げ、三二競技で熱戦の夏を迎える。ロシアのウクライナ侵攻やガザ情勢で世界が揺れる中、近代五輪の父、クーベルタンの生地に戻る。



教育とは何か？

「正定聚」について

―大拙・英訳「教行信証」の研究―



吉原 宏文
(昭四二卒)



かつて、宮城教育大学の初代学長・林竹二先生が言われた。即ち、「哲学のない教育は、教育の自殺である」、また、「教育を誤ると国を亡ぼす」と。実に、教育の研究対象は人間そのもの、即ち「人間学」である。この娑婆世界に生を受け、幼少から成長し、社会人として独立し、やがて結婚し、次の世代へbatonを渡していく。

親鸞聖人は、「教行信証」の後序のなかに、唐の道綽・禪師（五六二―六四五）の著である「安樂集」（二巻）の一節を引用されている。「前に生れんものは後を導き、後に生れんひとは前を訪へ、連続無窮にして、願はくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽さんがためのゆゑなり」と。

さて、中国の仏教哲学者、天台大師智顛（五三八―五九七）は、

「摩訶止観」（十巻）を著した。摩訶は梵語mahāの音写で、偉大なという意味である。「止」はsamathaの漢訳で「奢摩他」と音写し、諸々の想いを止めて、心を一つの対象に集中する。止息・寂静と漢訳する。それによつて、正しい智慧を得て対象を観る。「観」は、vipassanaの漢訳で「毗婆舍那」と音写し、妙観・正見と漢訳する。この二つを結合して「止観」という。即ち、散乱した心を離れ、思いを止めて、心が静寂になった状態をいう。

ところで、我々人間の生きていくこの娑婆世界(saha-loka-dhātu)は、雑染堪忍の群萌の世界である。その中で、我々人間(衆生)は、有身見(sakkāya-ditthi)、即ち、「肉体的個体存在を自我と想いやす見解」に固執し、内に諸々の苦悶・煩惱を受け、外

には、寒・暑、風・雨などの苦しみに堪え忍ばねばならない。

さて、英訳「教行信証」の序論の研究も、いよいよ、佳境に入ってきたと思う。

概して、我々は、阿弥陀仏が我々に向つて救済の釣り針(hook)を降し、その釣り針を掴むのは、我々自身の努力、あるいは能力であると考えている。しかし、真仏教(浄土真宗)の見解では、我々が考えているような能力は我々のものでなく、全て阿弥陀仏から来る、と主張する。我々は皆、有限存在であり、阿弥陀仏の願力が活発に釣り上げるのであつて、我々にはそのような力はない。この点では、我々は絶対的に受け身である。全ては、阿弥陀仏から来る。我々が本当に教化され、救われるのは、この絶対的無抵抗、あるいは、この無条件の信頼性を認めるときだけである。他力(other-power)が全てであり、自力(self-power)は零である。即ち、これが無限の光と永遠の命の阿弥陀仏を目指す真宗の立場である。

しかしながら、我々は、肯定的にしろ否定的にしろ、絶対的受動性あるいは無条件の降伏について

声明を出す限り、全てを自覚している何かあるは誰かがあるはずである。即ち、受動的あるいは能動的などな形であれ、少しでも自覚している存在者があることを想起しなければならぬ。その場合、自らを他者と区別するある種の主体があると言わなければならない。自身を自覚している存在者は、ある程度独立した存在であり、判断能力のある精神に恵まれた存在者である。釣り針(hook)が小川に降され、もし餌を掴む魚が自らの行動を自覚しているならば、その魚は骨と筋肉の単なる塊ではない。即ち、魚は心を有し、その心は、その魚に、他の魚とは異なる資格を与える。人が、彼の全存在をもつて、全てに影響力を持つ阿弥陀仏の大悲(Mahakaruna)の力に素直に身を任せ、即座に行動するならば、彼は能動的行為者であると同時に受動的受領者でもある。ここで、自己矛盾が確認される。即ち、AはAであると同時に、非-Aである、と。これは神秘である。我々は皆、この神秘を生きている。事実、命自身が神秘である。至高の悟りは、まさに、この神秘の経験そのものである。それ故、

仏教徒は言う、即ち、瞬間は永遠

であり、零は無限であり、悟り(bodhi・菩提)は、人間の激情(Kesa・煩惱)そのものである、と。更に言えば、浄土に生まれることは、非誕生の誕生(無生の生)である、と明言する。そして、有限性と業の因果律(karma causality)の領域で起こるこの世の生―死の感覚で浄土を解釈すると、浄土は「何処に」あり、「何で」あるか、が判らなくなる、と。これは、真仏教(真宗)の教義において最重要の声明である。

それならば、先の純粹他力の信奉者が、入場することを許される浄土とは何か?もしも浄土に生まれることが、無生の生であり、また、浄土が全ての自己矛盾の形式が統一され、あるいは確認され、「全一知」は「無一知」であり、全ては「無一為」によつてなされる領域であるならば、浄土は、真実には、全く、非存在の王国ということになる。もしも浄土が絶対他力の成果であり、意識的自力への余地がないのであれば、我々人間が行為し、思考するのは何か。もしも、阿弥陀仏が国土を支配し、その大悲の特質によつて、他者を愛し、最高の利益を与えるとする場合でさえ、自力意識をもつ個別的存在者の入場を許す

ことはできない。何故なら、自分で行為し、あるいは思考する意識があるならば、いずれにせよ、自己の意識、即ち、自力であるから。自力によつては、自己表明のいかなる様態も許さないのであれば、絶対他力の浄土の全ての住人は自己―意識をもたない一個の石ころか、木の塊に委えられるであろう。一方、自己意識は全ての人間個人に許された特権である。人が今、阿弥陀仏の国土に向つて断固として行動する仲間(聚)にある「正定聚」と、自分の心に感じるのは自己意識の形式である。もしも、彼がほんのわずかでも、阿弥陀仏の愛情を共に味わう特権をもたなければ、彼は浄土の一人であることはできない。どの学派に属するかにかかわらず、全ての仏教思想家は、一切衆生は仏性を授けられており、我々は皆、相互に、一律に、そして普遍的に、仏になり、浄土の住民になりえる運命にある、と断言する。親鸞聖人は、「煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相回向の心行(仏より回向された信心と称名)を獲れば、即のときに大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するがゆえに、必ず滅度に至る」と。

不可能であり、命は論理的に構成されない。真実には、論理学は命の上に建てられる。命は、論理学を支配する。その逆ではない。これは不可思議(神秘)の中の不可思議として周知のものである。全て、本物の価値をもつ宗教はその上に確立される。個人としての我々は、罪深い存在であり、激情(Desire・煩惱)の支配に引き渡された、無知で傷つけられた存在であり、全く知恵(Practical・智慧)を欠いている。この事実にもかかわらず、我々は阿弥陀仏の大悲の御蔭で教化され、見事に浄化される。この事実、あるいは、真相が自我意識に反映されるとき、ここには自己の力(自力)によるものは何もない。全ては、阿弥陀仏の他力、あるいは、彼の、本来の祈り(本願・pūrvapranidhāna)による。これは、全く、我々の論理的解決を超えている。実に、この不可思議(神秘)が自分に悟られると、いかなる摂理の疑問も消滅する。精神、あるいは、心理的雰囲気(cittagocara・心所行)のこの態度に生きることが、浄土の住者になることである。

浄土は、歴史的に、伝説的に、あるいは仏教文学で、どのようなに描写されているであろうか? 永遠の生命についての経(無量寿経)に物語られている浄土の描写に関する限り、浄土はあまりにも唯物論的であり、幾つかの点では大変矛盾し、また不合理でさえある。人間が有限かつ限界の相対世界である娑婆世界に慣れ親しんで生きていることが邪魔になつて、どんな時間の長さであれ、形而上学的時間単位に生きることが、人間にとつては殆ど不可能である。勿論、浄土は地上の国土ではなく、無限の光と永遠の命の阿弥陀仏によつて建立された場所である。我々は、この灰色で暗くて陰気な我々の住処に似せ、あるいは接近するものを浄土に予期することはできない。真実には、そのような浄土は、我々の責任による如何なる種類の描写も無力にしなければならぬ。しかし、ヒンズー教徒の想像力は、浄土を詩的に、眩く、美しく表現することに最善を尽した。その結果、我々は地上の観点から判断して、浄土を最も望ましい場所と感ずるようになった。

と希少な金属で全て飾り立て(莊嚴・solemn furniture・vyūha)られていた。柔らかに寛がせる微風は庭全体を吹きぬけていた。池は、満開の花で咲き満たされ、空気が芳しい香りで気持ちよい。小鳥は囀り、三宝(仏・法・僧)の驚くべき徳を賞賛して国土のあらゆる方面に響きわたつていた。浄土は、全存在者(一切衆生)が此の世の後の誕生を熱望することを勧められる場所である。読者は、当然、如何にして、本当に招待されるかを知りたいであろう。併し乍ら、皮相的には、浄土は、我々の住居を此の世から転ずるために、招待される場所では決してない。何故ならば、經典に告げられているように、浄土の表現についていえば、あまりにも唯物論的で、幾つかの点は矛盾し、不合理でさえあり、人間が此の世でできるように、そこで生きることが殆ど不可能である。何故ならそれは、大部分、余りにも奇想天外に豊かな色彩で浄土を表現するインド人の想像力の所為である。

併し乍ら、作者は、浄土は全存在者(一切衆生)に対して、彼の大悲(Mahakaruna)によつて促進され、我々の、もつと正確に言えば、菩薩の賞賛に値する行為の成果である、と語ることを忘れてはいない。全存在者(一切衆生)は、あらゆる形式の恐怖と苦悩を必ず抱かせる有限と限界と束縛と疑念の暗黒の下で生きている。浄土は正に、これら全ての正反対である。其処では、阿弥陀仏の無碍かつ無限の光が、無条件に、あらゆる制限を超えて広がる。感覚と理知で縛られた人間に、この生存(existence)の状況を悟らせることは極めて困難である。インド人の天才は、浄土を無理矢理、どちらかというところ、かなり遊戯的、唯物論的(実利主義的)に描こうとする。浄土は、七つの貴重な石で積み重ねられ、目も眩むように照らされている。同時に、美しい家具(vyūha・莊嚴)のこの型を楽しんでいる。彼らは神でも人でもない。彼らは高度に抽象的で、いわば形而上学的存在者であり、この感覚の世界(娑婆世界・saha-loka-dhātu)の者ではない。併し、見たところ、現存(existence)のこの矛盾する形式は、阿弥陀仏の信奉者に不都合を引き起こさない。何故なら、彼らが誠実に信頼しきつて、阿弥陀仏の名前を発音(称名)するや、その瞬間に存在そのものをすっかり忘れ、全ての矛盾は消滅し、皆一

緒に如何なる形態も空しくなる絶対的に「純粋な」平安と幸福の国土に案内される。これは、創造性と自由の領域である。此処で生じる奇跡的転換は、本当に人間の理解力を超えた神秘（不可思議）である。信奉者は、これは、阿弥陀仏の無碍かつ無限の光に起因すると信じている。浄土は、この真理の象徴である。この「清浄」は、汚れや混合や欠点のないことを意味するものではない、と銘記すべきである。それは、有限や限界や条件付きなどのあらゆる形式を超越した「絶対的」を意味する。そのような存在は、全ての建築物、庭園だけでなく、様々な調度品・事実、浄土の全ては、国土の全体的アイデアを象徴化し、特殊化するように造られ配置されている。浄土は、無限で無碍の光そのものであり、人間精神の分光器を通して反射されると、浄土は、自らを莊嚴 (vyūha・装備) の無限の多様性に分割される。虚空が、今、十分な装備の多様な部品で飾られ美化される。そして、人間が浄土に住めるように、移動させられ、適合する。

の基盤として、一絶対的實在 (One Absolute Reality) があることを忘れてはならない。天親は、それを齊一的 (ひとつにまとまる) 法句 (真理のことは) (Ekadharmapadam) 即ち「一絶対的存在 (One Absolute Being)・南無阿弥陀仏」として指定する。その別名は大智 (Mahāprajña・absolute wisdom) であり、キリスト教の至聖の實在 (Godhead・神性・神格) と一致する。それは、神性が動き、自らを造物主 (Creator) である神に変える人間的思考方法からくる神秘 (不可思議) である。この造物主は、仏教の大悲 (Mahakaruna・great compassionate heart) である。何故なら、浄土が自らに多数の莊嚴を備え付け、あるいは提供するものは、大悲の御蔭であるから。莊嚴は価値あるいは功德である。天親が「完成された莊嚴」について語りたいのは、倫理的かつ心霊的価値が実現し、功德の貯蔵が成熟してきたことである。

ここで、注目すべきは、我々が有する齊一的法句 (南無阿弥陀仏の名号) の象徴としての浄土の莊嚴は、どんなものであれ、思弁と感じの完成と実現が個人的にも社会的にも非常に重要である。厳密に言えば、それは、一般に大悲の泉から湧き出る「功德の善なる貯蔵」と呼ばれる。こうして、我々は大悲の仏教概念は、造物主としてのキリスト教の神と一致することを確認する。

こうして「一絶対法句 (南無阿弥陀仏) は、考慮すべき二点、即ち、大智 (Mahāprajña) と大悲 (Mahakaruna) において理解することができ。一つは、絶対的に純粋であり、二つは、眞實智慧 (Being or Being Aware) と非一実行 (存在・行為・働き・創造) の法一実体である。従って、一絶対法語 (南無阿弥陀仏) は、自覚と生成の同一性の本体であり、日本語の無限が阿弥陀 (A-Mita) として擬人化されたものである。この真理の体得は、親鸞によって、「一直線 (straightforward)」とは対照的に「横」まに (crosswise) と指名された「跳躍 (横超)」として、我々の心に経験される。

ここに、英訳された「教行信証」として周知の親鸞の著書は、有限と限界の此の世の実生活において、法蔵菩薩の物語を例証する試みである。今、ここに、大要を述べてきたこの序論は、親鸞と彼の浄土教を理解するうえで、読者の助けになるであろう。そして、親鸞と眞仏教 (浄土眞宗) の次のテキストを通して流出する思想動向の全体的理解のため、私 (大拙) は「大無量寿経」の康僧鑑 (Sanghavarman) の中国語訳の四十八願を英訳した。即ち、大経から法蔵菩薩の四十八願を要約している詩句 (偈頌・仏の功德を誉め讃える歌)、浄土の家系図の描写、そして、浄土に生まれる存在の天親 (Vasubandhu) の「浄土論」(無量寿経優婆塞舍願生偈) である。これは彼の祈りである。また、中国人の注釈者・曇鸞 (四七六―五四二) は、親鸞の「教行信証」の基盤を形成する天親の「浄土論」について、最も明晰な解説書・「論註」を著した。

二〇二四年 (令和六年)
六月十三日 (木)
私の八十二歳の誕生日
広島市安佐南区長束
一丁目十八ー五
一五
明 静庵主



表紙のことは



平井 晴樹
(令和六年卒)

『春麗に沈む』

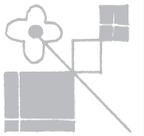
「光」によって作り出される様々な色彩の輝きや、人物の一瞬の動きを捉え、そこに存在する心の動きを描いていくことを意識しています。本作品『春麗に沈む』は、卒業研究で制作した作品のうちの一つです。優しい春のそよ風と穏やかな陽の光を反射する草花の世界。彼女の弾けるような笑顔と仕草、透明感を描いています。表情と空気感の瞬間的な動きや刹那的な心の動き、陽の光を常に大切にしており、日常に溶け込む様々な色彩や彼女を纏う空気感一つ一つを感じて欲しいと思っています。画面の中の世界に沈んでいくように彼女に魅入ってくださるのが本作品としての本望です。



入院生活雑感



阿部 修一
(昭五二卒)



昨年四月には「脳梗塞」の治療のため長期入院することになり、同窓会事業（特に会報一三六号の発行、支部長会等）に支障を与えてしまったこと大変申し訳なく思っております。この場をお借りしてお詫び申し上げます。三か月を超える入院生活の中ではいろいろ感じたり、考えさせられることが多々ありました。

【二〇三日の入院生活】

昨年四月一八日早朝、いつもの時間に起きて、食事の席に着いたものの何故か気分が悪く食欲が湧いてこないため、「少し休んでいれば治るだろう」と自室でしばらく横になって徐々に左手足に痺れがではじめたのです。「何かおかしい？」と思いつつも二時間あまり気分の悪さを我慢して横になつてみると病院関係者の長男が夜勤明けで帰り、状態を聞くなり「それはもしかしたら？」と近所の脳神経科の病院を予約してくれ、診察を受けることになりました。MRIの結果は「脳幹の脳梗塞です。緊急入院の必要がありません」との診断を受け、着の身着のまま自宅近くのT病院に連れて行かれそのまま入院することになりました。その日はまだ自力で歩けるし、手も思うように動いてい

たため「入院と言っても四〜五日で退院できるだろう」と軽く考えていたのですが、甘かったです。翌朝目を覚ましトイレに行くこととベッドから立ち上がったところそのまま転倒！左半身が全く動かないのに意識は動くこと認識しているつまり自身の身体の変化に頭がついていない状態だったのです。（この転倒は多いそうです）何とかナースコールで助けを求めましたが、その後の看護師さんたちは急遽ベッドをナースステーションに近い看護師さんの出入りの多い重度の患者さん用の部屋に移したり、ベッドの周りにセンサーを張り巡らしたりして常に見守りができる環境に変えるなど大変だったようです。後で聞いた話ですが、看護師さんたちにとって「患者が転倒」と言う事態は絶対避けなければならぬ「最重要事項」だそうです。そんなことはつゆ知らず「トイレの時は必ずナースコールで呼んで！」と厳しく言われていたのにそれを守らなかった私が悪いのですが……。このことがあって初めて自分の身体の状態が理解でき、素直な患者になりました。その後は、看護師さんたちの指示や注意に必ず「転倒したらいけない」という言葉（心

の予防注射）がつくようになりました。

T病院では三六日間お世話になり、リハビリと献身的な看護・介護のおかげで病状も良くなり専門的な病院でのリハビリが可能というところでM病院に転院することになりました。気持ちも新たに介護タクシーでM病院に行くこと病院の決まりで入院前には全身のレントゲン等の健診が必要であるとのこととで、受けたところ大腸に「異物」があることが判明したのです。M病院はリハビリに特化した病院で医療的な治療はできないため、まずこの異物の正体を知ることが先決とのドクターの判断で翌日の朝S病院に急遽転院となりました。「何か飲み込んだか記憶はないか？」との問いに「確か半年前に歯の被せ物が外れ飲み込んだ」と話す。「その可能性が高い。半年前だと大腸の壁に巻きついている可能性が高く治療に時間がかかるかも？」とのドクターの返事、リハビリに専念して早く退院したいと意欲をもっていた矢先だったのでかなりショックを受けました。S病院での内視鏡検査の結果、異物の正体はバリウムの塊で三月に県の健診を受けた際に飲んだものが引つかかっていたとのことでした。担当の医師もまさかバリウムとは思いませんでしたと言われるほど数少ない症例だったそうです。「ついでにポリープを二つほど取っておきました」と笑顔で言われましたが、喜んでいいのかどうかわ複雑な気持ちでした。S病院には一週間入院し、再度M病院に

その日からM病院でのリハビリの毎日が続きました。リハビリはT病院と同じで理学療法、作業療法、言語療法を受けましたが、T病院と違うところはそれぞれの単位時間が長いと言うところです。リハビリに特化した病院であるだけに設備や器具が充実していて、意欲的に訓練に取り組むことができました。両病院とも療法士さんが若く、そのパワーをもらったことも早く退院できた理由の一つかと思っております。M病院でも献身的な看護・介護を受け、入院六七日目に退院することができました。医師からは「相当頑張られたのですね！思った以上に回復が早いです」と言われるほどでした。後遺症として左手足の痺れが残っていますが、皆さんに迷惑をおかけした分、しっかりとお返ししたいと思っております。根気よく復帰を待っていただいた会長をはじめ役員の皆様のおかげだと心より感謝しております。

【目標をもつ大切さ】

「脳梗塞」という病名を聞いた時は事の重大さを理解していなかったため、十日あまり左半身がほとんど動かない自分の身体の現実を知ったときは、悪いほうにばかり考えるようになり、「良くて車椅子生活、最悪寝たきりで介護を受ける状態」を覚悟してしましました。ましてや自分で歩くなど考えもしませんでしたし、固まった左手足の状況から歩けると言うこともありませんでした。ただただ、「人生終わった」と絶望の二文字が頭の中をよぎるだけでした。そんな時、T病院のリハビリ療法士

さんから「諦めたらその時点で手足は動きませんよ。脳梗塞で損傷した細胞は元に戻りませんが、人間の脳細胞は歳に関係なく、使っていない眠っているものが多くあり、損傷した細胞の周りにも沢山あります。それを起こしましょう！動かなくても動いている状態を意識して、リハビリに取り組んでください。要は阿部さんが動かそうと言う気持ちで前向きに取り組むか、「もういいや」とあきらめるかどうかです。この一か月が大切です」とアドバイスを受けたのです。「可能性があるのでから努力しましょう」ということだったのです。この言葉は五十年近く障がい児者の教育・就労に関わってきた中で私自身が常に教え子にかけていた言葉そのものだったのです。（恥ずかしい限りです）

また、T病院のリハビリ室の壁には坂村真民さんの詩「念ずれば花ひらく」の額が訓練室に入れば必ず見えるように飾られているのですが、それは全ての患者さんにあきらめないで強い思いをもって頑張つて欲しいという願いと、共に同じ思いで訓練に望むという療法士全員の思いからだと言葉を受けました。「可能性」という言葉と「念ずれば花ひらく」という詩を目にしたとき、私の中に「やる気」が湧き上がったことを覚えて

それからは長期の目標を「杖をついてでも自分の足で歩いて病院の玄関出る」、短期の目標を好きな釣りで餌をつけるために「親指と人差し指で物がつまめるよう

令和6年度 支 部 長 会 報 告

- 1 日 時 令和6年6月8日(土)
 2 場 所 校友会館2F サロン
 3 日 程 (1) 開会のことば
 (2) 会長挨拶…高橋治郎会長
 (3) 教育学部長挨拶…日野克博学部長
 (4) 各支部長及び理事自己紹介
 (5) 議事

<p>議長選出 1号議案 2号議案 3号議案 4号議案 5号議案 6号議案 7号議案 8号議案 9号議案 10号議案</p>	<p>北条支部：毛利直史校長 令和5年度事業報告 令和5年度決算報告 監査報告…松山支部：大久保礼子校長 令和6年度本部役員改選案について 令和6年度同窓会役員案について 令和6年度事業計画案について 令和6年度予算案について 令和6年度支部助成金案について 令和6年度支部活動支援費について 第19回愛媛大学教育学部懇親会について その他 会員への会報送付方法について 事務局体制変更について（事務二人体制・留守番電話設置等）</p>
---	--



<p>議長退出 (6) 連絡事項 配付資料1 資料2</p>	<p>第15回ホームカミングデーについて 事務局への連絡方法について 愛媛大学教育学部同窓会会則 支部活動支援金交付要綱及び様式</p>
---	--



4 概 要

- 今年度の支部長会は支部長23名（県内支部22名、県外支部：岡山支部1名）と本部役員19名の計41名の参加のもと事務局からの提案議題（1号議案～10号議案）について協議を行い、全ての議案について承認を得ることができた。
- 顧問の日野教育学部長からは、今後教育学部の重点課題として①大学改革に連動した教育学部の改革②組織の合理化と機能の強化③教職員の健康とウェルビーイングの3点についてお話をいただいた。また、教育学部を取り巻く現状として①入口（受験生の確保・高校との連携・地域枠という入試枠）②在学時（中学コースの複数教科・複数免許・地域別生プログラム・5年間教育プログラム）③出口（卒業後の採用）等についての構想のお話をいただいた。
- 協議後半には、支部OB・OG会員への会報配布状況や問題点等について近くの支部長同士で話し合う時間を設定し、2支部より現状の報告があった。
- 事務局からは議案と関連して運営における今年度の大きな変更点として「事務局二人体制：月から金まで午前中は事務局員が業務に就き、さらに留守番電話の導入も検討し学部事務員の負担を減らす」ことの提案を行い、承認を得た。

また、以前から課題となっていた支部OB・OG会員への会報配布方法について会長より希望者には事務局からの直接郵送システムの構築構想が示され、今後実現に向けての多くの課題を検討することになった。

令和6年度 役員表

愛媛大学教育学部同窓会

本	顧問	日野克博・奥定一孝		監事	大久保礼子	事務局長	阿部修一
	会長	高橋治郎			宮脇克彦		
部	副会長	井上洋一		菅田 颯		村上朋子	
		阿部 晋		桐山真美		矢野裕司	
	理事	青野多喜夫	竹上正也	山本千鶴子	満田泰三	村上嘉一	
		和田和子	後藤陽三	辻井芽美子	白石久美子	渡邊恵理	
		金築治美	相原郁子	山内 望	藤谷素三子	石川 圭	
		越智政英	鴻上亜希	幸島恭輔	高橋祐貴		

支 部 名	支 部 長		副 支 部 長		副 支 部 長	
	川之江・新宮	篠原隆輔	川之江南中	佐藤恵美	川之江南中	出射隆裕
伊予三島	毛利雅彦	中曾根小	石川貴紀	中之庄小	一柳直宏	寒川小
土 居	星野尚子	長津小	浦津和人	関川小	伊藤由美	土居中
新居浜	井川昭二	泉川小	鴨田礼子	金子小	丸山律子	宮西小
西 条	石原道代	神戸小	桧垣由紀子	橋 小	藤原道明	大町小
東予・周桑	山田裕之	壬生川小	杉野 学	石根小	大砂直樹	吉岡小
今 治	藤原勝彦	富田小	三好春彦	吹揚小	山口峰松	立花中
今治・越智	菅 洋二	朝倉小	川崎文一	吉海小	近藤 勲	菊間中
北 条	毛利直史	北条小	川西 潤	栗井小	檜垣賢志	河野小
松 山	大久保礼子	雄郡小	中矢達雄	新玉小	森脇和夫	鴨川中
東 温	熊田 堅	西谷小	橋本英樹	川上小	松本俊秀	川内中
伊 予	宮岡浩一	宮内小	高石達也	南山崎小	則友美紀	麻生小
上 浮 穴	佐藤 太	久万中	竹本明仁	仕七川小	三上義成	明神小
大 洲	飯野剛宏	菅田小	長谷晃徳	河辺小	岩本康孝	長浜小
喜 多	宮部修一郎	大瀬中	水口雅彦	小田中	佐々木治彦	大瀬中
八幡浜	河野 清	八代中	浮田和人	白浜小	河野恵子	真穴小
西 宇 和	井上 太	伊方中	松本啓進	伊方小	大石友紀	三机小
西 予	三好則史	三瓶小	西川浩司	宇和町小	上田徳彦	石城小
宇 和 島	永井 悟	住吉小	清水美和	清満小	森 泰祐	奥南小
北 宇 和	松本智昭	泉 小	平井敬浩	泉 小	上甲和典	日吉小
南 宇 和	片山新也	一本松小	銚岩俊二	城辺中	井上 武	家串小
附 属	山内 望	附属特支	石川 圭	附属特支		

県外支部	東 京	成見由紀子	森 孝枝		
	京 都	河野直樹			
	大 阪	令和4年度3月解散			
	神 戸	平山昇			
	岡 山	神崎順治	内田二三夫		小出悦子

編集委員	村上朋子	阿部 晋	矢野裕司
	阿部修一		

令和5年度 事業報告

令和6年度 事業計画

Table with 3 columns: Date, Event Name, Details. Includes events like '令和5年度入学式', '令和4年度会計監査', '第1回常任理事会', etc.

Table with 3 columns: Date, Event Name, Details. Includes events like '令和6年度入学式', '第1回常任理事会', '第1回理事会', etc.

令和5年度 決算書

令和6年度 予算書

(収入の部) (単位:円)

(収入の部) (単位:円)

Income Statement Table for FY2023. Columns: Expense Item, Budget, Actual Income, Increase/Decrease, Summary.

Income Statement Table for FY2024. Columns: Expense Item, Budget, Previous Year Budget, Increase/Decrease, Summary.

(支出の部)

(支出の部)

Expense Statement Table for FY2023. Columns: Expense Item, Budget, Actual Expense, Increase/Decrease, Summary.

Expense Statement Table for FY2024. Columns: Expense Item, Budget, Previous Year Budget, Increase/Decrease, Summary.

残高 2,237,905円 (次年度への繰り越し)

※△は減額を示す

愛媛大学教育学部同窓会会則

第1章 総則

第1条 (名称)

本会は、愛媛大学教育学部同窓会と称する。

第2条 (所在地)

本会は、事務局を松山市文京町3番地愛媛大学教育学部事務課内に置く。

第3条 (支部)

本会は、愛媛県下各郡市及び必要と認めるところに支部を置く。

第2章 目的及び事業

第4条 (目的)

本会は、会員相互の親睦向上を図るとともに、母校を支援し、もって教育振興に寄与することを目的とする。

第5条 (事業)

本会は、目的達成のため次の事業を行う。

1 会員の親睦並びに教育振興に関する事業

2 会報発行に関する事業

3 母校の支援に関する事業

4 その他本会の目的を達成するために必要な事業

第3章 会員

第6条 (会員)

本会は、次の会員をもって組織する。

1 正会員
・愛媛師範学校(男・女)卒業生
・愛媛青年師範学校卒業生
・愛媛大学教育学部卒業生
・愛媛大学大学院教育学研究科等修了生

2 客員
・母校の現教職員及び旧教職員

3 準会員
・愛媛大学教育学部在学生
・本学部卒業生外の大学院教育学研究科 在学生

第4章 役員

第7条 (役員)

本会に、次の役員を置く。

1 顧問 若干名 会長 1名 副会長 若干名

2 理事 若干名 常任理事 若干名

3 監事 2名

4 事務局長 1名

5 支部長 各支部1名 副支部長 各支部若干名

6 支部幹事 各支部1名 副支部幹事 各支部若干名

7 支部幹事 各支部1名

8 支部幹事 各支部1名

9 支部幹事 各支部1名

10 支部幹事 各支部1名

11 支部幹事 各支部1名

12 支部幹事 各支部1名

13 支部幹事 各支部1名

14 支部幹事 各支部1名

15 支部幹事 各支部1名

16 支部幹事 各支部1名

17 支部幹事 各支部1名

第9条 (役員任期)

4 支部長は、各支部において選任する。
5 支部幹事は、支部長が委嘱する。
第9条 副会長・理事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。なお、任期途中で交代した場合は、前任者が残した任期とする。

第10条 (役員任務)

1 顧問は本会の主要な事項について諮問に応ずる。
2 会長は、会務を総括する。
3 副会長は、会長を補佐し会長事故あるときはその職務を代行する。
4 常任理事は、常任理事会を組織し、本会の諸事業を企画立案し、理事会の議案に資する。
5 理事は、理事会を組織し、本会の主要事項について協議する。
6 監事は、本会の事業状況及び収支決算状況を監査する。
7 支部長は、各支部の会務を掌る。

第5章 会議

第11条 (総会)

1 総会は年1回開催し、支部長会をもって総会に代えることができる。
2 事業報告・決算書
3 事業計画・予算書
4 役員選出
5 本会の目的達成に必要な事項

第12条 (支部長会)

1 支部長会は、本会の目的達成に必要な事項について協議する。
2 支部長会は、会長が招集し、必要ときは臨時招集することができる。
3 支部長会の議長は、支部長の中から選出する。

第13条 (理事会)

1 理事会は、年3回(5月・8月・1月)開催し、常任理事会より提出された議案について協議する。
2 理事会は、会長が招集する。必要あるときは、臨時招集することができる。
3 理事会の議長は、会長が務める。

第14条 (常任理事会)

1 常任理事会は、年5回開催し、会則第5条に示された事業の企画立案をし、理事会の議案資料の作成にあたる。
2 常任理事会は、会長が招集する。必要あるときは、臨時招集することができる。
3 議案資料の作成は、事務局長がこれにあたる。
4 常任理事会の議長は、会長が務める。

第6章 会計

第15条

1 本会の経費は、会費及び寄付金等をもってこれにあてる。
2 本会の会費は、入学の際に納めるものとする。
3 本会の会計年度は、4月1日から翌年3月31日までとする。

第7章 会則変更

1 本会の会則を変更するときは、総会の決議を経なければならない。
2 本会の会則は、令和元年6月8日より実施する。
3 本会の会則は、令和5年7月8日より実施する。
4 本会の運営上必要な内規は別に定める。

附則

第18条

1 本会の会則は、令和元年6月8日より実施する。
2 本会の会則は、令和5年7月8日より実施する。
3 本会の運営上必要な内規は別に定める。

愛媛大学教育学部同窓会 支部活動支援金交付要綱

第1条

【目的】

この要綱は、愛媛大学教育学部同窓会（以下「愛教同窓会」という。）会長が、「愛教同窓会」活動の振興と支部活動の活性化を図るため、各支部及び支部に属する会員が行う自主的な活動に対して、予算の範囲における支援金交付に必要な事項を定めるものとする。

第2条

【支援金申請者】
本事業の申請者は、支部長とする。

第3条

【支援金対象事業及び支援額】
本事業の対象となる事業活動及び支援金額は審査会（常任理事会）において審議する。

第4条

【支援金申請手続き】
本事業支援金を受けようとする支部及び支部に属する会員は、「愛教同窓会」会長が定める期間内に、下記書類を「愛教同窓会」事務局に提出しなければならない。
(2)(1) 支部活動申請書（様式第1号）
その他、必要と認める添付書類

第5条

【支援金の交付決定】

「愛教同窓会」会長は、前条の規定による申請を受理した場合、その内容をすみやかに審査し、常任理事会の意見を聞いて支援金の交付を決定するものとする。

2

「愛教同窓会」会長は、前項の規定により支援金の交付を決定したとき、すみやかにその旨を申請者に通知するものとする。

第6条

【支援金の交付請求】
支援金の交付決定を受けた申請者は、すみやかに支援金交付請求書（様式第2号）を「愛教同窓会」会長に提出しなければならない。

第7条

【愛教同窓会】会長は、申請者から交付請求書の提出があった場合、書類受理後常任理事会を経て交付する。

第8条

【活動実績報告および決算報告】
支援金を受けた申請者は、支援事業の交付決定にかかる年度の11月30日までに、下記の書類を「愛

第9条

【交付の取り消しまたは返還】

「愛教同窓会」会長は、次の各号いずれかに該当する場合は、交付決定の全部または一部を取り消し、支援金の全部または一部を返還させることができる。

- (1) 支援金の交付申請に不正の事実があったとき
- (2) 支援金を目的以外の用途に使用したとき
- (3) 支援事業を中止したとき
- (4) 支援事業を遂行する見込みがなくなったとき
- (5) この要綱に違反したと認められたとき
- (6) 実績額が支援金交付額に満たないとき

第10条

【その他】
この要綱に定めるもののほか、支援金交付に関する必要な事項は、「愛教同窓会」会長が別に定める。

(様式第1号) 年 月 日
愛媛大学教育学部同窓会
会長 高橋 治郎 様

愛媛大学教育学部同窓会 支部
支部長 印

愛媛大学教育学部同窓会支部活動支援金申請書					
支部名					
活動名					
活動予定日時					
参加員数 (予定数)	現職	人	その他	人	総計
	OB	人			人
支部の活動目的・内容 (活動目的・内容をできるだけ簡潔に記入 ※詳細は計画書添付のこと)					
目的					
議題・点検					
内容	※天災かたに記入後、実施計画書を添付				
予算書	※天災かたに予算額を記入後、受けたい支援金額を記入 ※予算書添付のこと				
申請支援金(最大額を記入)					円
※ただし、手数料込の金額とする。					
本件連絡先	Email: dosokai.ed.ehime@gmail.com 電話: 089-927-9383(月・水・金の午前中)				

(様式第2号) 年 月 日
愛媛大学教育学部同窓会
会長 高橋 治郎 様

愛媛大学教育学部同窓会 支部
支部長 印

愛媛大学教育学部同窓会支部支援金請求書				
活動名				
活動日時	年 月 日()	:	~	:
請求金額				
一 金				
上記金額を支部支援金として請求いたします。				
代表者(担当責任者名) 印				
振込先	金融機関名	支店名	口座名	口座番号

(様式第1号) 年 月 日
愛媛大学教育学部同窓会
会長 高橋 治郎 様

愛媛大学教育学部同窓会 支部
支部長 印

愛媛大学教育学部同窓会支部活動支援金申請書					
支部名					
活動名					
活動予定日時					
参加員数 (予定数)	現職	人	その他	人	総計
	OB	人			人
支部の活動目的・内容 (活動目的・内容をできるだけ簡潔に記入 ※詳細は計画書添付のこと)					
目的					
議題・点検					
内容	※天災かたに記入後、実施計画書を添付				
予算書	※天災かたに予算額を記入後、受けたい支援金額を記入 ※予算書添付のこと				
申請支援金(最大額を記入)					円
※ただし、手数料込の金額とする。					
本件連絡先	Email: dosokai.ed.ehime@gmail.com 電話: 089-927-9383(月・水・金の午前中)				

第19回愛媛大学教育学部 同窓会懇親会について

現在、愛媛大学及び教育学部は耐震工事及び組織改編に伴う教室等のリニューアルにより、会員の皆さんが在籍していた当時（特に平成20年以前）と比べて、正門付近や建物の外観また教育学部内の教室・研究室等が大きく変わっております。そこで会員の皆さんにも学内（特に教育学部）の現在を知っていただきたく、「第19回愛媛大学教育学部同窓会懇親会」の会場を大学構内の生協食堂に設定しました。当日は、教育学部校舎内の見学時間（11：00～）を設けておりますので、ぜひこの機会にご参加いただき、当時は振り返っていただければと思っております。

皆さんのご参加をお待ちしております。申し込み方法は以下の通りです。

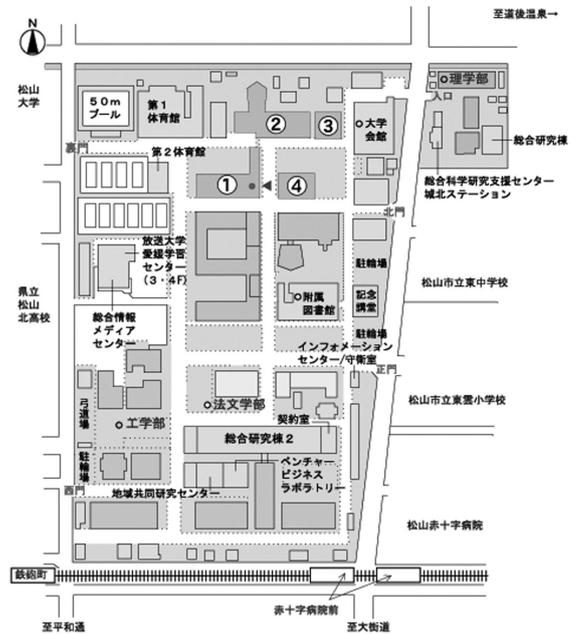
日時
令和6年8月25日(日) 12:00~15:00
 受付: 11:30 開宴: 12:00

場所
 愛媛大学生協2階 パルト

会費
 6,000円



松山市文京町3番
 ☎089-924-2544



申し込み方法

- 申し込みは、直接同窓会事務局に電話またはメールでお申し込みいただくか、会報137号(本年2月発行)とともにお届けした振込み用紙で会費をお振り込みください。振込みをご利用の場合は、手数料が派生いたしますので、ご注意ください。
- 電話またはメールでお申し込みいただいた会員の方には、事務局より確認の連絡(ハガキ・メール等)を送ります。

申し込み締切り期日

令和6年8月7日(水)

※準備の都合上、上記期日とさせていただきます。

大学構内及び教育学部の現在



整備された大学正門前



旧運動場跡地と工学部1号館



大学生協



売店「えみか」



くつろぎの場「アクアカフェ」



学内保育園「えみかキッズ」



教育学部玄関前



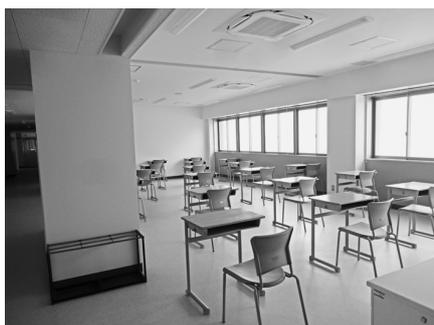
耐震補強後の2号館



耐震補強後の4号館



2号館玄関



2号館オープン教室



2号館廊下

放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では二〇二四年十月入学生を募集中です。

〔募集期間〕 二〇二四年六月十日（月）～二〇二四年九月十日（火）

放送大学はインターネットやテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員特に現職の方々は次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

- 放送大学の大学院を利用して、専修免許状の取得が可能です。
- 放送大学の科目を利用して、特別支援学校教諭免許状の取得が可能です。
- 放送大学の科目を利用して、司書教諭資格の取得が可能です。

資料を無料で差し上げております。

お気軽に愛媛学習センターまでご請求下さい。



放送大学

教養はエネルギーだ。

一科目からでも学べます

2024年度10月入学生募集中！
(2024年9月10日まで)

問合せ先 **愛媛学習センター**
TEL 089-923-8544

●インターネットで資料請求・出願できます。 ●資料請求専用フリーダイヤル
放送大学 www.ouj.ac.jp ☎ 0120-864-600

事務局からのお知らせ

事務局体制について

今までの事務局は1名で基本の業務時間は、月・水・金の午前中となっていました。そのため、会員の皆さんからのお問い合わせ等に対して即座の対応ができないことが多く、ご不便・ご迷惑をおかけしておりました。また、教育学部事務部の職員の方たちにも同窓会担当者が不在時の電話対応・伝言等助けていただいております。

こうした状況を改善すべく検討を加えてきていましたが、この度予算の目処もたち令和6年6月8日の支部長会で承認をいただき、事務局員を1名増員することになりました。新体制は以下に示す通り、月～金までの午前中は事務局員が常時滞在し、会員の皆様からのお問い合わせ等に対応いたします。午後につきましては、事務局員は不在となりますが、留守番電話を設置して対応いたします。なおその場合、お問い合わせ等につきましては翌日になります。

旧			新		
曜日	AM	PM	曜日	AM	PM
月	事務局員対応	↘	月	事務局員対応	留守番電話対応
水	事務局員対応		火		
金	事務局員対応		水		
			木		
		金			

図1 新事務局体制

※留守番電話対応は早くとも7月以降になります。

寄贈図書紹介



『教師冥利』

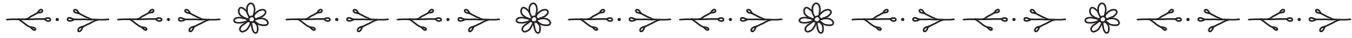
寄贈者・著者

小崎 佳奈子

A 5 版 246頁

発行所 株式会社文芸社

印刷所 図書印刷株式会社



敬弔

(物故会員)



(死亡年月日)

(氏 名)

(死亡年月日)

(氏 名)

(死亡年月日)

(氏 名)

5・1・7

藤岡 一夫
(昭20・愛師)

6・3・8

門屋 睦夫
(昭29・愛大)

6・5・9

宇都宮伊明
(昭39・愛大)

5・11・26

岩市 照雄
(昭23・愛師)

6・3・11

岸田千寿子
(昭21・愛師女)

6・5・14

薬師神正則
(昭22・愛師)

5・12・8

玉井 慧
(昭24・愛師)

6・3・16

真部 昭二
(昭41・愛大)

6・5・30

大峰 敏男
(昭25・愛大)

5・12・18

関 健二
(昭30・愛大)

6・3・14

鴻上 政士
(昭36・愛大)

5・12・19

阿部 淳敬
(昭19・愛師)

6・3・21

小野 貞枝
(昭26・愛大)

5・12・26

岡原 紀
(昭37・愛大)

6・3・24

藤原 恭慶
(昭30・愛大)

5・12・28

南 勉
(昭20・愛師)

6・3・25

山本 道國
(昭30・愛大)

6・1・5

井上 教
(昭41・愛大)

6・4・2

三好 浩
(昭38・愛大)

6・1・24

清水 岩門
(昭24・愛師研)

6・4・9

池本 滋乃
(昭21・愛師女)

6・1・27

小松 宗治
(昭26・愛大)

6・4・10

青木タクヨ
(昭32・愛大)

6・1・27

竹崎 恵美
(昭21・愛師女)

6・4・27

山下 重徳
(昭37・愛大)

6・2・6

末廣 通男
(昭30・愛大)

6・4・29

長岡 勉
(昭20・青師)

寄付者名

令和六年二月、
令和六年六月

- 常盤井 守興 様
- 紅谷 博美 様
- 沖原 義光 様
- 小崎 佳奈子 様
- 上森 寿雅子 様
- 平松 則重 様
- 吉原 宏文 様
- 新田 正人 様
- 菊澤 康 様
- 佐々木 千恵子 様
- 花房 勲・春香 様
- 長岡 勉 様

※ 同窓会へのご寄付ありがとうございます
1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 10) 11) 12)

会員写真館

会員から俳句・短歌の専門出版社本阿弥書店より発行されている広渡敬雄著『俳句で巡る日本の樹木50選』に愛媛大学構内に「わが国屈指の泰山木の並木道がある」と紹介されているとの情報がありました。以下に、紹介されている泰山木の並木道（現在）を紹介します。（詳細は、広渡氏の著書64P～65Pをお読みください。）



売店「えみか」前から見た西側の泰山木



教育学部本館と泰山木



教育学部より東側の泰山木



泰山木の花

ぜひ、愛媛大学の泰山木の並木道を散策してみてください。

文芸欄

今回は在学生の作品を紹介します。



小学校サブコース4回生：森井 萌花
「ハートフル」



中等美術4回生：永安卯咲希
「動物愛護啓発アニメーション『ENN』」



中等美術3回生：竹中 瑞希
「I can't fly」